HLAB 2014

ANNUAL REPORT

TOKYO : 2014/8/15 ～ 8 /23
OBUSE : 2014/8/14 ～ 8 /20
TOKUSHIMA : 2014/8/16 ～ 8 /22

「怖かったけど、本当に楽しかったよ。」高校１年の夏、留学と言う全く得体の知れないオプションを前に、迷っていた僕を後押ししてくれたのは、高校の先輩のそんな言葉でした。

そして３年後にハーバード大学へ。驚くべきことに、寮生活を通して得た経験も、全く同じでした。同級生や学部の先輩を見て「こんなやばい同世代に負けてられない」と感じ、大学院生に教えを受ける中で、研究者としての生活を垣間見、社会人経験者と食事に行きながら進路と人生を考えさせられる・・・。時には将来を選択する情報源に、時にはその一歩を踏み出す励みに。身近にいる人たちからの言葉以上の学びのリソースはないのです。同じコミュニティにいる人から受ける影響。自分に近い、でもかっこいいお兄さん、お姉さんの影響。リベラル・アーツ教育の本質は、実はそんな身近なところにあります。

「ハーバードのリベラル・アーツ教育を再現して高校生へ届け、日本の進路指導やキャリア教育に風穴を空ける。」

そんな思いを胸に、震災直後、勇気を持って日本に足を踏み入れてくれた20名の学友と、日本での準備で奮闘した学友、その姿勢を見て支援を決めてくれた方々。その全員の思いは、受け継がれ、今年でHLABは４年目を迎えました。当初の東京に加え、小布施、徳島。スピンオフプログラムを加えると、全国五カ所で開催されました。高校生、ハーバードをはじめ海外の大学生、日本の大学生、そして各界の支援者から、地元の方々までを巻き込み、HLABの提唱するリベラル・アーツの形は、日本全国へ広がりつつあります。

HLABの出身者には、留学に踏み出し後輩としてハーバードに進学する者も、あるいは日本の大学で活躍の場を見いだすものの、はたまた大陸を変えプロの写真家を目指すものも。研究に励む者も、コンサルタントとしてグローバル企業の課題解決に取り組む者も、英語教師になった者も。ただ共通して言えるのは、彼らが自分の属するコミュニティで輝き、その経験を持ってHLABの場に戻ってき続けているということです。国境や言語に限らず、世代や地域、様々なコミュニティ間を隔てる「ボーダー」を全く気にせず、世界中どこでも活き活きと活躍し、お互いに刺激し続けるコミュニティ。HLABは、サマースクールを越えた存在に成長してきました。この場を借りて、ご支援をいただきました皆様に感謝の気持ちを改めて申し上げると共に、HLABから巣立った者の活躍を10年、20年と楽しみに見守っていただけますよう、お願い申し上げます。

HLAB 代表
小林 亮介

目次

0. 小林挨拶 ...2
- 三開催地を代表して

1. About HLAB ...4
1.1 共通プログラム：4本柱
1.1.1 セミナー
1.1.2 フォーラム
1.1.3 フリーインタラクション
1.1.4 ワークショップ
1.2 主催団体・企画・運営団体

2. 三開催地実施概要 ...6

3. 事前活動 ...7
3.1. 座談会
3.2. 説明会
3.3. 広報活動

4. 高校生選考 ...8

5.東北奨学生制度 ...10

6. ハウス制度 ...10

7.メディア掲載 ...11

8. 東京 ■
8.0. 共同実行委員長 挨拶 ...12
8.1. タイムラインと振り返り ...13
8.1.1. 8月15日 (1日目)
8.1.2. 8月16日 (2日目)
8.1.3. 8月17日 (3日目)
8.1.4. 8月18日 (4日目)
8.1.5. 8月19日 (5日目)
8.1.6. 8月20日 (6日目)
8.1.7. 8月21日 (7日目)
8.1.8. 8月22日 (8日目)
8.1.9. 8月23日 (最終日)
8.1.10. 全体タイムライン
8.2. リベラルアーツ・セミナー ...14
8.2.1. リベラルアーツ・セミナーとは
8.2.2. セミナー一覧
8.2.3. セミナー紹介
8.3. フォーラム ...17
8.3.1. フォーラムとは
8.3.2. 黒川清氏基調講演
8.3.3. 遠藤健氏
8.3.4. 日本語フォーラム
(松田 悠介氏、吉岡 利代氏、朝比奈 一郎氏)
8.3.5. Kathy松井氏
8.3.6. Harvard生対談
8.3.7. 村山斉氏
8.3.8. 竹内弘高氏
8.4. ワークショップ ...18
8.4.1. ワークショップとは
8.4.2. アイスブレイク・ワークショップ
8.4.3.自己分析・ワークショップ
8.4.4.Apple Film Making Workshop
8.5. その他イベント ...19
8.5.1. 開会式
8.5.2. リフレクション
8.5.3. タレントショー
8.5.4. ホームカミングディナー
8.5.5. フリーインタラクション
8.5.6. Pluralism
8.5.7. 閉会式
8.6. 参加者について ...20
8.6.1. 参加者内訳
8.6.2. 高校生の声
8.6.3. ハウスリーダーの声
8.6.4. ハーバード生の声
8.6.5. 実行委員の声
8.7. 終わりに ...23

9. 小布施 ■
9.0. 実行委員長 挨拶 ...24
9.1. タイムラインと振り返り ...25
9.1.1. 8月14日 (1日目)
9.1.2. 8月15日 (2日目)
9.1.3. 8月16日 (3日目)
9.1.4. 8月17日 (4日目)
9.1.5. 8月18日 (5日目)
9.1.6. 8月19日 (6日目)
9.1.7. 8月20日 (最終日)
9.1.8. 全体タイムライン
9.2. リベラルアーツ・セミナー ...26
9.2.1. リベラルアーツ・セミナーとは
9.2.2. セミナー紹介
9.3. フォーラム ...29
9.3.1. フォーラム概要
9.3.2. 小川幸司氏
9.3.3. 貝沼航氏
9.3.4. 詩歩氏
9.3.5. 鈴木邦和氏
9.3.6. 関和亮氏
9.3.7. 福井佑実子氏
9.4. ワークショップ ...30
9.4.1. ワークショップとは
9.4.2. アイスブレイク・ワークショップ
9.4.3. EGAKUワークショップ
9.5. その他のイベント ...31
9.5.1. 開会式
9.5.2. リフレクション
9.5.3. お祭り
9.5.4. フリーインタラクション
9.5.5.ビブリオバトル
9.5.6.インタビュー
9.5.7.ホームステイ
9.5.8.大学生向けセミナー
9.5.9.タレントショー
9.5.10.ホームカミング・ディナー
9.5.11.スーパーリフレクション
9.5.12.閉会式
9.6. 参加者について ...34
9.6.1. 参加者内訳
9.6.2. 高校生の声
9.6.3. ハウスリーダーの声
9.6.4. セミナーリーダーの声
9.6.5. 実行委員の声
9.7.終わりに ...36

10. 徳島 ■
10.0. チーフ・コーディネーター 挨拶 ...37
10.1. タイムラインと振り返り ...38
10.1.1. 8月16日 (1日目)
10.1.2. 8月17日 (2日目)
10.1.3. 8月18日 (3日目)
10.1.4. 8月19日 (4日目)
10.1.5. 8月20日 (5日目)
10.1.6. 8月21日 (6日目)
10.1.7. 8月22日 (最終日)
10.2. リベラルアーツ・セミナー ...39
10.2.1.リベラルアーツ・セミナーとは
10.2.2.セミナー紹介
10.3. フォーラム ...40
10.3.1. フォーラムとは
10.3.2.猪子寿之氏
10.3.3. 山崎繭加氏、竹内隆司氏、大宮透氏
10.3.4. 坂東幸輔氏
10.4. ワークショップ ...41
10.4.1. ワークショップとは
10.4.2. アイスブレイク・ワークショップ
10.4.3. ダイアログセッション
10.4.4. カツオのたたき、心太ワークショップ
10.4.5.行灯ワークショップ
10.4.6.大漁旗ワークショップ
10.5. フリーインタラクション ...42
10.6. その他のイベント ...43
10.6.1. 開会式
10.6.2. リフレクション
10.6.3. タレントショー
10.6.4. 肝試し、キャンプファイヤー
10.6.5.メールシステム
10.6.6.閉会式
10.7. 牟岐町との連携 ...44
10.8. 参加者について ...44
10.8.1. 参加者内訳
10.8.2. 高校生の声
10.8.3. ハウスリーダーの声
10.8.4. 海外大生の声
10.8.5. 運営委員の声
10.9. 終わりに ...46

1. About HLAB

―「今時の若者は内向きだ」

「ゆとり教育の失敗」と批判され続けてきたことに加えて、事の真偽はともかくとして、留学生の減少傾向を挙げて、こ う叩くメディアの風潮はここ数年に入り強くなったように思われます。近年、ハーバード大学の日本人学部生はHarvard College Japan Initiative を立ち上げ、卒業生と協力して、日本の高校からアメリカの学部へ進学するための情報提供、カレッジ・フェア等を行ってきました。 ただ私たちの高校時代を振り返れば、本質的な問題は実はもっと身近なところに存在することが浮き彫りになります。「海外」以前に、「社会人」、「大学生」、さらには「他校の高校生」との間にさえ、大きな壁や交流の機会の欠落、すなわち「ボーダー」が歴然と存在しています。自分の高校以外の世界とあまり触れない閉鎖的環境、関心の探索や将来の選択肢をあまり意識しない空気、そこにこそ「内向き」問題の本質があると考えます。この状況を打開するために、大学生には何か出来な いだろうか、この思いが原点となり始まったのが、HLABでした。

―ボーダーを超えた世代間交流が教育にもたらす可能性

世界有数の国際的経済都市である日本の首都、「東京」。個々の所属や世代、国籍、分野が異なった、あらゆる人・情報が交錯するこの地の多様性と、世界各国から集まる学生の多様性の融合には、大きなポテンシャルがあるのではないでしょうか。そして、タテ(社会人)・ナナメ(大学生)・ヨコ(同世代)の人的交流を創出することで、コミュニティを軸とした情報共有の活性化を図ることができるのではないでしょうか。HLABは、このような可能性を追求すべくスタートした教育プロジェクトです。高校生を対象としたサマースクール・プログラムの企画運営を通じ、新たな教育の形を考えます。

―大学生と高校生の相互交流を基軸に据えた、サマースクール・プログラム

数カ国からハーバード大学の現役学部生を招き、日米の大学生が協力して、ハーバード大学のカリキュラムを模したリベラル・アーツのセミナーを自分の専門分野で自由に設計し、高校生に対して開講します。著名人の講演会を包括的にプログラムに組み込み、共同生活を送りながら、大学生が高校生にとって最も身近なロールモデル・情報源となることで、「ともに」 将来を考え、新しい教育の形を考えます。HLAB はハーバード大

学のリベラル・アーツ教育の理念とモデルを導入したサマースクールです。

—DIVERSITY (多様性) × INTERACTION (交流)

サマースクールにおける「リベラル・アーツ」とは何か。それは「高校生が自身と向き合い関心を探した上で、将来を主体的に選択するために最大限のサポートをする環境」です。私たちは、そのような環境を創出するために「 "ボーダーを超えた人的交流を可能にする" ハブの創出」をミッションに掲げています。 日米の大学生が多様なロールモデルとなり、専攻や大学、留学情報やキャリアの活きた情報源として、また各分野の社会人とをつなぐ懸け橋、他のコミュニティとの交流のカタリストとして、高校生をサポートします。多様なコミュニティ間の 交流を創出するという新たな教育の形は、高校生だけでなく、社会にまでもインパクトをもたらすことができるのではない だろうか。本プログラムは、このような教育の新たな可能性を追求する「**LAB**」、実験室です。

セミナー

フォーラム

フリーインタラクション

ワークショップ

1.1 共通プログラム：4本柱

1.1.1. セミナー

リベラルアーツ・セミナーは、高校生により幅広く自己の関心を探してもらうリベラルアーツの根幹となるプログラムです。ハーバード大学を初めとした海外大学の現役学部生(以下:セミナーリーダー)が中心となり、各自の専攻や最も興味のある分野において、高校生を対象としたセミナーを設計します。文献や作文等の事前課題含め、セミナーは全て英語で行われますが、各セミナーリーダーには、日本語と英語が堪能なバイリンガル学生であるハウスリーダーがペアとして付きます。セミナーの中の通訳等の語学面でのサポートや、セミナー設計の補助を行います。より深い理解と学生の積極的な参加の場を追求するため、授業は少人数で行われます。事前に作成されたシラバスをもとに、高校生は複数の異なるテーマのセミナーを受講します。各セミナーのテーマは多岐に渡り、料理をメインテーマとした化学の授業から、日本では学問としての認識が薄いダンスまで、多様なセミナーが開催されました。こういった多様なテーマを扱うセミナーを通し、大学での「学び」を疑似体験することによって、学習への意識やアプローチを再定義することを目的としています。

1.1.2. フォーラム

各日午後の時間帯には、政治、経営、物理、芸術等様々な分野のトップで活躍されている有識者の方々をお招きし、御自身のライフストーリーを含む「今、高校生に伝えたいこと」をテーマにご講演頂き、質疑応答を行いました。講演で語られる彼らの経験や、熱いメッセージを通して、参加者にとって新しい価値観との出会いや将来を考察するきっかけとなることを目的としました。日本語、または英語でご講演頂いた後、高校生・大学生と講演者の対話を意識した長めの質疑応答や、また講演者と同じ目線で交流・議論できるようなレセプション、フリーインタラクションを設計する等、高校生・大学生・海外大生といった３つのアクターが能動的に参加し、対話を行うことが可能となる学びの場を創造することを目指しました。

1.1.3. フリーインタラクション

フリーインタラクションは、サマースクールに社会人ゲストの方々をお迎えし、大学生、高校生との対話を創出する場です。個性豊かなバックグランドや、多様なご職業、ご専門を持った方々と、世代を越えた交流を行います。高校生がより幅広い視野を持って自分の興味関心を考えるきっかけとなることを目指します。また、それぞれの分野に精通した人々による生の声を、より近い距離でお話を聞くことができます。日頃なかなか出会うことができない方々と、肩書き関係なくざっくばらんに交流ができる場を提供しています。

1.1.4. ワークショップ

自らの能動性を思う存分発揮し、心と体で学びを感じるのがワークショップです。参加者間の交流や日本文化の理解を共通の目的としながら、各開催地の特色を活かしたワークショップを実施しました。東京ではApple Ginzaのご協力のもと、動画作成を通じサマースクールを振り返るワークショップ、小布施では小布施にお住まいの方々の生き方や価値観に触れるインタビュー・ワークショップ、徳島では南海の幸を堪能するかつおのたたきワークショップ等を始めとする沢山のワークショップが実施されました。参加者は他者や自然との交流を通じ、日常の高校生活で経験するものとはひと味違った学びを吸収しました。

1.2 主催団体・企画・運営団体

東京

主催団体 : 一般社団法人インパクト・ファウンデーション・ジャパン

企画運営 : HLAB2014実行委員会
*HLABはHCJIの協力により企画・運営されております。
HCJI : Harvard College Japan Initiative(ハーバード大学の公認団体)

代表者 : 村上理香子(rikakomurakami556@gmail.com)
International Christianity University 3年

代表者 : 野村善文(nomuyoshi.15@gmail.com)
Haverford College 2年

協賛 : 三菱商事株式会社
株式会社ピー・アンド・イー・ディレクションズ

共催 : 政策研究大学院大学

後援 : 朝日ネット

メディアスポンサー : 日本経済新聞社

助成 : 米国大使館 TOMODACHI Initiative

アドバイザー(五十音順) :
黒川清　政策研究大学院大学教授、東京大学名誉教授
竹内弘高　ハーバード大学経営大学院教授、一橋大学名誉教授
横山匡　アゴス・ジャパン代表取締役、JAOS理事

小布施

主催団体 : 小布施町
一般社団法人インパクト・ファウンデーション・ジャパン

企画運営 : HLAB2014実行委員会
*HLABはHCJIの協力により企画・運営されております。
HCJI : Harvard College Japan Initiative(ハーバード大学の公認団体)

代表者 : 佐々木弘一（obuse14sasaki@gmail.com）
東京大学教養学部文科一類2年

協賛 : 三菱商事株式会社
P & E Directions
有限会社いろは堂
オブセ牛乳

後援 : 小布施町教育委員会
長野県教育委員会
日本経済新聞社

助成 : 米国大使館 TOMODACHI Initiative

アドバイザー(五十音順) :
黒川清　政策研究大学院大学教授、東京大学名誉教授
竹内弘高　ハーバード大学経営大学院教授、一橋大学名誉教授
横山匡　アゴス・ジャパン代表取締役、JAOS理事

徳島

主催団体 : 徳島県教育委員会
一般社団法人インパクト・ファウンデーション・ジャパン

企画運営 : 徳島×Summer School by HLAB運営委員会
*HLABはHCJIの協力により企画・運営されております。
HCJI : Harvard College Japan Initiative(ハーバード大学の公認団体)

代表者 : 水上友理絵(yurilily1210@gmail.com)
London School of Economics and Political Science

2. 三開催地実施概要

東京

名称 : HLAB2014(エイチラボ2014)
ウェブサイト : http://tokyo.h-lab.co
Facebook : https://www.facebook.com/hcji.lab
Twitter : https://twitter.com/hcji_lab
連絡先 : info@hcji-lab.org
開催日程 :
2014年8月10日（日）～14日（木）: オリエンテーション(東京)
2014年8月15日（金）～23日（土）: H-LAB2014サマースクール本期間(東京)
2014年8月24日（日）～26日（火）: 事後プログラム(東京)
宿泊施設 : 鳳明館・森川別館(東京都文京区)
施設協力 : 政策研究大学院大学(東京都港区)
アークヒルズクラブ(東京都港区)
アカデミーヒルズ（東京都港区）
Apple Store, Ginza (東京都中央区)
セルバンテス文化センター(東京都千代田区)
参加者 : 高校生79名
ハーバード大学学部生23名
日本側大学生スタッフ36名　　計138名

小布施

名称 : 小布施 × Summer School by H-LAB（オブセ・サマースクール・バイ・エイチラボ）
ウェブサイト: http://obuse.h-lab.co
Facebook : https://www.facebook.com/obusesummer2014
Twitter : https://twitter.com/hlab_obuse
連絡先: info@obuse-lab.org
開催日程 :
2014年8月10日（日）～8月12日（火）：オリエンテーション（東京）
2014年8月13日（水）：オリエンテーション（小布施）
2014年8月14日（木）～8月20日（水）：小布施 × Summer School by H-LAB 本期間（小布施）
2014年8月21日（木）～8月23日（土）：事後プログラム（小布施・長野）
2014年8月24日（日）～8月25日（月）：事後プログラム（東京）
宿泊施設：小布施町福祉施設千年樹の里健康福祉センター
施設協力：小布施町役場
小布施町立栗ガ丘小学校
小布施町立図書館（まちとしょテラソ）
参加者：高校生50名

海外大学生：16名
日本側大学生：33名　　計99名

徳島

名称 : 徳島×Summer School by HLAB (トクシマ・サマースクール・バイ・エイチラボ)
ウェブサイト: http://tokushima.h-lab.co/
Facebook : https://www.facebook.com/hlab.tokushima
連絡先 : info@tokushima.h-lab.co
開催日程 :
2014年8月10日（日）～13日（水）: オリエンテーション(東京)
2014年8月14日（木）～15日（金）：オリエンテーション（徳島）
2014年8月16日（土）～22日（金）:徳島×Summer School by HLAB 本期間(徳島)
2014年8月22日（金）～23日（土）：事後プログラム（徳島）
2014年8月24日（土）～25日（月）: 事後プログラム(京都)
2014年8月26日（火）～27日（水）：事後プログラム（東京）

宿泊施設:牟岐少年自然の家（徳島県牟岐町）、徳島県立鳴門渦潮高校（徳島県鳴門市）、正観寺（徳島県牟岐町）、京都/宇多野ユースホステル（京都府京都市）、鳳明館・森川別館(東京都文京区)

施設協力:牟岐海の総合文化センター（徳島県鳴門市）、徳島県立城東高等学校（徳島県徳島市）、京都府立嵯峨野高等学校（京都市右京区）、政策研究大学院大学(東京都港区)

参加者:　高校生39名
　　日本側大学生スタッフ34名
　　海外大生10名　　計83名

座談会

3. 事前活動

3.1 座談会

HLAB実行委員会では、年間を通じた活動の一環として、進路についての相談会を開催しております。様々な進路を選択した大学生を招き、自分の進路決定の理由や振り返って思うことなどを高校生へと伝え、高校生たちから自由に質問をする場を設けることで、高校生たちに主体的に進路を考える機会としてもらうことを目的に実施しております。2014年の開催実績は以下の通りです。

＜東北＞
5月29日（木）白河市内
5月30日（金）仙台市内
5月31日（土）仙台市内

＜関東＞
3月17日（月）　成蹊高等学校
4月26日（土）　国学院大学久我山高等学校
5月 9日（金）　かえつ有明中高等学校
5月28日（水）　早稲田本庄高等学院
5月15日（木）　聖光学院高等学校
5月22日（木）　ぐんま国際アカデミー
5月23日（金）　栃木県立足利女子高等学校
5月23日（金）　群馬県立高崎高等学校

＜中部・近畿・中国＞
5月19日（月）　海陽高等学校（愛知）
5月25日（日）　広島市青少年センター
5月25日（日）　岡山大学
5月28日（水）　南山国際高等学校（愛知）
8月12日（火）　YWCAガールズキャンプ（長野）

＜九州・沖縄＞
5月16日（金）　都築学園リンデンホールスクール福岡中高学校
5月30日（金）　興南高等学校（沖縄）
5月30日（金）　昭和薬科付属高等学校（沖縄）
5月31日（土）　沖縄尚学高等学校（沖縄）
5月31日（土）　星空公民館座談会（沖縄）

説明会

3.2 説明会

全国からの高校生の応募を促進するために、説明会を実施し、サマースクールのコンセプトやプログラム内容についてお伝えしました。東京、大阪、名古屋にて計5回実施し、多くの高校生や保護者の方々にご参加頂きました。

開催日程・場所
第1回:4月29日(火)　東京大学　駒場キャンパス (東京)
第2回:5月11日(日)　東京大学　駒場キャンパス (東京)
第3回:5月17日(土)　天満インキュベーションラボ (大阪)
第4回:5月18日(日)　名城大学名駅サテライト (名古屋)
第5回:5月24日(土)　明治大学駿河台キャンパス (東京)

＜長野県内＞
5月 8日(木)　長野県飯田高等学校
5月 9日(金)　長野県中野西高等学校、長野県岩村田高等学校
5月10日(土)　小布施町立図書館まちとしょテラソ
5月12日(月)　長野県長野高等学校、長野県上田高等学校
5月13日(火)　長野県松本深志高等学校
5月15日(木)　佐久長聖高等学校、長野県野沢北高等学校
5月18日(日)　長野市もんぜんぷら座
5月19日(月)　長野県上田染谷丘高等学校
5月22日(木)　長野県長野西高等学校
5月29日(木)　長野県諏訪二葉高等学校、長野県諏訪清陵高等学校
6月3日(火)　長野県飯山北高等学校

＜徳島県内＞
5月 7日(水)徳島県立富岡東高等学校
5月13日(火)徳島県立富岡西高等学校
5月14日(水)徳島県立城東高等学校
5月17日(土)徳島市シビックセンター
5月18日(日)徳島市シビックセンター
5月22日(木)徳島県立徳島北高等学校、徳島文理高等学校

3.3 広報活動

サマースクールの広報のために、印刷媒体としてはポスターならびにチラシを用いました。また、Web媒体としては公式ホームページ・Facebookページ・Twitterアカウントを用いた広報活動を展開しました。昨年に引き続き全国紙では日本経済新聞、日本教育新聞にご紹介いただいた他、小布施・徳島では多くの地方紙・地方局にご特集いただきました。

4. 高校生選考

本年度の選考においては、東京・小布施・徳島の三開催地合計で600名を越える応募の中から、選考書類によって計170名の参加者(内訳:東京80名・小布施50名・徳島40名) を決定しました。アメリカの大学入試制度で広く取り入れられている制度を採用し、第1次選考(Early Action)ならびに第2次選考(本選考)の2度に分け、選考を行いました。プログラム開催地に関わらず、全国各地からの参加があり、海外の高校に通う高校生に至るまで非常に多様な地域から学生が集まりました。選考においては、HLAB2014への参加に対する強い意欲、学びに対する好奇心、人との交流とそこから学ぼうとする積極的な姿勢や、HLABを契機に成長しようとする高い意識等を重視し、参加者を決定しました。

スケジュール

5月25日(日) 第1次 (Early Action) 締め切り
6月 6日(金) 第1次合格発表
6月 8日(日) 第2次（本選考）締め切り
7月 1日(火) 第2次（本選考）合格発表

応募資格

応募資格は三開催地域統一し、以下のように策定しました。
1. 2014年5月時点、日本・海外の高等学校、高等専門学校、インターナショナルスクールの高校生である方。
2. プログラムの全日程に参加可能であり、かつ参加にあたり保護者の同意を得られている方。
（途中参加はいかなる理由にあっても認められません。）
3. 期間中、事前、事後活動に責任をとって取り組める方。

選考課題

選考問題は各地域の実行委員会が、それぞれのプログラムが求める高校生像を策定し、以下のように別々の問題が作成されました。(三地域共に<section1>/<section2>は基本情報とし、東京では自己PRは任意問題としました。)

東京

<section3>
あなたは普段、人との関わりの中でどのような役割を果たしていますか？具体的なエピソードを挙げて説明しなさい。
*文字数制限:800文字
<section4>
あなたの失敗の定義を、具体的な経験を踏まえて教えてください。その際、引用を用いてはいけません。
*文字数制限:800文字
<section5>
Please write a letter to your future self. It's for you to decide when you write to.
*文字数制限:400words

小布施

<section3>
Why are you applying to 小布施×Summer School by H-LAB? What kind of person do you want to be after this summer school? Please answer in English.
*文字数制限:300words
<section4>
あなたの人生を振り返ったときに、一番悩み、決断したことは何ですか。
その決断をした理由と、それが今の自分にどう影響したかを書きなさい。
*文字数制限:500wordsもしくは800文字(使用言語は英語か日本語とする)
<section5>
もしあなたが新しく高校を作るとしたらどのような学校を作りますか。その理由とともに教えてください。
*文字数制限:200wordsもしくは400文字(使用言語は英語か日本語とする)

<section6>
自己PRをしてください。
*自由記述問題につき、使用言語や文字数の制限無し。

徳島

<section3>
Why are you applying to 徳島×Summer School by H-LAB? What kind of person do you want to be after this summer school? Please answer in English.
*文字数制限:300words
<section4>
以下の二つから一つ選び、答えなさい。
・異なる経験や考えを持つ人と、協力して成し遂げたことを、教えてください。
・サマースクールが終って、一か月がたちました。サマースクールで出会った友達に手紙を書いてください。
*文字数制限:200wordsもしくは400文字(使用言語は英語か日本語とする)
<section5>
自己PRをしてください。
*自由記述問題につき、使用言語や文字数の制限無し。

長野県小布施町

徳島県牟岐町

5. 東北奨学生制度

HLAB2014では、昨年度に引き続き、東日本大震災で被災した高校生の教育支援の一環として、米国大使館とそのトモダチ・オフィスからの助成金を頂き、東北奨学生枠を設けました。東北地方を中心に積極的に座談会や説明会を行った広報活動の結果、16名の学生からの応募がありました。本選考を行った後、合格者の中で東北地方出身の学生にのみ案内を行い、結果的として東京に2名、小布施に2名の計4名の学生を奨学生として参加費全額免除で受け入れる形となりました。8月13日(水)にはTOMODACHI Initiativeよりご招待を頂き、東北奨学生を対象に米国大使館の見学ツアーとスタッフの皆様との親睦会も開催されました。

スケジュール
2014年7月 1日 : 第2次（本選考）合格発表・東北奨学金案内送付
2014年7月15日 : 課題締め切り
2014年7月18日 : 合否発表
2014年8月13日 : 米国大使館・トモダチ・オフィス見学ツアー開催

応募資格
以下の二つを東北奨学生応募の応募要項と策定した。
1. 東京もしくは長野県小布施町で開催される2014年度HLABプログラムに参加予定であること。
2. 2014年度5月段階で、東北の高等学校・高等専門学校・インターナショナルスクールに所属していること。

選考課題
前述したプログラム選考課題(4.高校生選考参照)に加え、東北奨学生としての適正を測るため以下の問を選考課題として課しました。
問1:東日本大震災はあなたがお住まいの県にどのような影響を及ぼしていますか？また、あなたの身近で起きている変化について可能な限り教えてください。
*字数制限:400文字(日本語)
問2:問1をうけて、あなたは自分の住んでいる地域、被災地の未来をよくするためにどのように行動していきたいですか。
*字数制限:400文字(日本語)

6.ハウス制度

ハウス制度とはハーバード大学の寮生活を模したシステムで、サマースクール期間中の食事、移動、風呂、就寝などの生活を共にする行動班の事を指しています。その他にも、ワークショップやリフレクション、少人数ディスカッション等ハウス単位で行う場合が多くあり、期間中最も多くの時間を共にします。各ハウスには、実行委員、日本人バイリンガル大学生（ハウスリーダー）、海外大学生（セミナーリーダー）、高校生が所属しており、更に各メンバーの経歴、英語力やHLABで受講するセミナーが異なるように工夫されています。そのため、どのハウスも多様性に溢れ、ハウスのメンバーは刺激し合い支え合うことでお互いの成長や変化を実感し合う仲間となります。

7.メディア掲載

【全国紙】

日本経済新聞：
- 2014年5月9日『ハーバード大生らが高校生に教養教育 8月、都内などで合宿』
http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG25038_Y4A500C1CR8000/

日本経済新聞電子版：
- 2014年9月6日『ハーバード流、高校生の鍛え方 徳島で出前授業』
http://www.nikkei.com/article/DGXMZO76609740U4A900C1000000/

高校生新聞：
- 2014年5月10日

日本教育新聞：
- 2014年4月28日『日米の大学生と宿泊体験で交流』
- 2014年5月19日『ハーバード大生が講師 高校生向けにサマースクール』

【地方紙】

中日新聞(県内版)：
- 2014年5月13日『 高校生サマースクール「H-LAB」説明会』

信濃毎日新聞：
- 2014年5月17日『高校生小布施で熱く学ぶ夏合宿 明日 長野で説明会』
- 2014年8月16日『米ハーバード大生ら講義県内外高校生活発に議論』
- 2014年8月23日『海外の大学生らと会話や散策 長野高生 英語で交流』

須坂新聞：
- 2014年8月23日『高校生50人が世界を感じた1週間 小布施でハーバード大のサマースクール』

朝日新聞（長野）：
- 2014年9月6日『海外が相手『発信』学ぶ 長野高１年、観光戦略づくりに挑戦』
http://www.asahi.com/articles/ASG9452VMG94UOOB00G.html

徳島新聞：
- 2014年5月18日『県の「英語村」サマースクール 徳島市、説明会に80人』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/05/2014_14003895620547.html

- 2014年8月14日『英語村参加者をおもてなし 牟岐町民、文化紹介や郷土料理提供』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/08/2014_14079748137647.html

- 2014年8月15日『県都に負けぬ乱舞 三好市・吉野川市』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/08/2014_14080663020928.html

- 2014年8月17日『牟岐で「英語村」初開催 国内外の大学生らと交流』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/08/2014_14082371250233.html

- 2014年8月18日『Tokushima英語村の運営委員長を務める水上友理恵さん』（コラム『人』）
http://www.topics.or.jp/special/12254542636/2014/08/2014_14083254916216.html

- 2014年8月19日『「やりたいこと実現を」 牟岐・英語村、県出身経営者ら意見交換』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/08/2014_1408425743993.html

- 2014年8月20日『カツオのたたき作り 牟岐の英語村、高校生ら体験』
http://www.topics.or.jp/local-News/news/2014/08/2014_14085083953393.html

読売新聞(徳島)：
- 2014年9月8日『未来広げる夏の英語村 6泊7日合宿牟岐で初開催』
http://www.yomiuri.co.jp/local/tokushima/news/20140907-OYT-NT50344.html

朝日新聞（徳島）：
- 2014年5月21日『高校生、目標見つけよう県内初のサマースクール』
http://www.asahi.com/articles/ASG5M3RVQG5MPUTB001.html
- 2014年8月21日『高校生の夢膨らむ英語村 伝統の行灯づくり楽しむ』
http://www.asahi.com/articles/ASG8N5R59G8NPUTB010.html

毎日新聞（徳島）：
- 2014年8月19日『サマースクール:高校生、英語漬け1週間 米国の学生らと交流 牟岐で初開催／徳島』
http://mainichi.jp/life/edu/news/m20140819ddlk36100604000c.html

時事通信(徳島)：
- 2014年8月22日『高校生が疑似留学体験＝ハーバード大生と合宿―徳島県教委』
http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/news/detail.php?newsId=20140822170420

徳島経済新聞：
- 2014年5月15日『徳島・牟岐町で「ハーバード流セミナー合宿」－高校生対象に』
http://tokushima.keizai.biz/headline/136/
- 2014年8月19日『徳島・牟岐町でハーバード大生による「サマースクール」－高校生40人が参加』
http://tokushima.keizai.biz/headline/190/

日本教育新聞（四国版）：
- 2014年6月16日『徳島で英語のサマースクール』

【雑誌】

週間朝日：
- 2014年10月3日号『ただいま過熱中！海外大進学を目指す子どもたち』

【フリーペーパー】

あわわ:
- 2014年6月号『キーワードは"リベラルアーツ"世界が広がるサマースクール』

【TV】

SBC信越放送:
- 2014年8月15日「SBCニュースワイド」
http://sbc21.co.jp/news/

須高ケーブルテレビ:
- 2014年8月25日放送「おぶせちゃんねる」
http://stvnet.blog122.fc2.com/blog-entry-1783.html

NHK徳島放送局:
- 2014年4月10日「とく６徳島」『「英語村」開催へ実行委員会」
- 2014年8月18日「おはよう徳島」『国際経験積むサマースクール』
- 2014年9月3日「とく6徳島」
http://www.nhk.or.jp/tokushima/toku6/

四国放送：
- 2014年8月14日「TVフォーカス徳島」
『ハーバードの学生が阿波踊り』
- 2014年8月26日「TVフォーカス徳島」
http://www.jrt.co.jp/
- 2014年9月19日「週刊あわのかわらばん」
http://www.jrt.co.jp/awakawara/

【その他】

町報おぶせ:
- 5月号 小布施 × Summer School by H-LABの参加者を募集
https://www.town.obuse.nagano.jp/uploaded/attachment/2597.pdf
- 6月号 ホストファミリーを募集
https://www.town.obuse.nagano.jp/uploaded/attachment/2658.pdf
- 7月号 小布施 × Summer School by H-LAB一般参加のお願い
https://www.town.obuse.nagano.jp/uploaded/attachment/2831.pdf
- 9月号 特集 さあ、旅をはじめよう
https://www.town.obuse.nagano.jp/uploaded/attachment/2908.pdf

8. 東京

8.0. 共同実行委員長 挨拶

平素より皆様におかれましては、益々のご健勝のこととお喜び申し上げます。2014年8月15日（金）から23日（土）の8泊9日間、多くの方々のご支援、ご協力に支えられ、「HLAB2014」を実施いたしましたことをここにご報告申し上げます。

本サマースクールはハーバード大学や海外の大学で用いられている「リベラル•アーツ教育」を通して、高校生の主体的な進路選択をサポートすることを目的としております。2011年度に開催され、本年度で4年目の開催となりました。本年度のHLABは、共に初年度のHLAB高校生参加者であるICU大学3年の村上理香子とハヴァフォード大学2年の野村善文が共同実行委員長を務めました。他にも実行委員、バイリンガル学生スタッフ、当日スタッフも含め、過去にHLABで原体験を得た学生が多く運営や企画に携わりました。また本期間中に行われる過去参加者を招いた企画「ホームカミングディナー」では、多くの過去参加者がHLABに帰ってくるサイクルが生まれており、世代の壁を越えたコミュニティーが形成されている様子も伺うことができました。

日本人大学生・ハーバード生・高校生全員が初めて顔を合わせる場となった開会式での実行委員長挨拶では、我々二人の原体験を持って、このような言葉で本年度のHLABは始まりを迎えました。
“We provide Japanese high school students a place to gather, meet people with different perspectives and see diverse career paths and future.If there are 80 students this year, there are 80 ways for each one of you to think about and proactively choose your future.”
「私たちは日本の高校生に様々な価値観や経験を持つ人々と出会い、集う場を提供し、幅広いキャリアの道があることに気付いてもらうきっかけを創造しています。今年80名の高校生が集まっているのであれば、80通りの将来がHLABの終わりに広がっています。」

HLABが過去4年間で高校生に与えてきた影響は、300名に及ぶ卒業生(アラムナイ)の活動を見れば明瞭であり、且つその広がりは目を見張るものがあります。自分の高校に戻って全校に経験を共有するのみならず、高校の壁を越え他校の学生と連携した活動を始める者、写真家を目指す事を決め留学した者、海外経験が無い中で海外大学への進学を決めた者…。今までの閉鎖的な環境の中では、出会うことのなかった人達との出逢いやそこから得た学びを通して、本当にやりたい事を追求する彼らの活動には幅広い多様性が見受けられます。

こうした機会を実現するため、開催当初よりアドバイザーとして支えてくださった黒川清氏、竹内弘高氏、横山匡氏のお三方、主権を引き受けてくださったIMPACT Foundation Japanの皆様、そして温かいご支援をいただいた、三菱商事株式会社の皆様、P&E Directionsの皆様、参加者の事前事後にわたる交流の場を提供してくださった、株式会社朝日ネットの皆様、助成金を頂きましたアメリカ大使館の皆様、多忙な日程の中ご協力くださった講演者の皆様、そして日本とボストンでのこの四年間プログラムの実施にあたりご協力いただいた多くの全ての方々に、改めて心よりお礼申し上げます。感謝の意を表するとともに、来年度以降も変わらぬご指導ご支援のほどを、何卒宜しくお願い申し上げます。

HLAB 2014　共同実行委員長
村上 理香子
野村 善文

8.1. タイムラインと振り返り

8.1.1.　8月15日 (1日目)

GRIPSで行われた開会式では、スポンサー、アドバイザーの方々から激励のお言葉をいただき、スポンサー代表として三菱商事株式会社の槙原稔氏よりお話をいただきました。開会式後は各ハウスに分かれ、レゴの高積み競争や自己表現をするアイスブレイクワークショップを行いました。アイスブレイク後は緊張がほぐれ、多くの笑顔が見受けられました。その後、高校生にとっては初めてとなる英語での基調講演を黒川清氏よりいただき、立食形式のウェルカムディナーを行いました。多様な参加者同士の会話を通し、高校生・大学生・社会人の枠を越えた交流をすることができました。

8.1.2.　8月16日 (2日目)

午前中にはセミナーリーダーと呼ばれるハーバード大学生によるセミナーが行われました。開講されている23種類の中から各高校生が選んだセミナーへの期待は大きく、意欲的に参加している姿が印象的でした。午後にはGRIPSにて遠藤謙氏によるフォーラムがあり、講演の後半には参加者が義足のデザインを考えるワークショップが行われました。各グループによる作品のプレゼンテーションでは、デザイン、機能の面で細部のこだわりを熱く伝えている高校生の姿が見受けられました。

8.1.3.　8月17日 (3日目)

午前中にはセミナーが行われ、午後にはGRIPSで朝比奈一郎氏、松田悠介氏、吉岡利代氏をお迎えした日本語でのパネルディスカッションを行いました。ディスカッションの後に、各スピーカーがそれぞれのブースに分かれ、より身近に質問を投げかけるセッションを実施しました。フォーラムの後は鳳明館の大広間にて初めてのフリーインタラクションを行い、多様なバックグラウンドを持つ沢山の社会人ゲストの方々にお越しいただきました。高校生と大学生、そして社会人が車座になり、世代を越えた活発な交流が生まれていました。

8.1.4.　8月18日 (4日目)

前半セミナー最後の授業を受け終えた高校生は、六本木アカデミーヒルズにてゴールドマンサックスのKathy 松井氏から日本経済や女性の就労について、またIPMU初代機構長の村山斉先生から宇宙のダークマターについての講演を受けました。その後、本郷周辺でハウス毎に夕食を取り、ハウス内での親睦を深めました。鳳明館に戻った後は、リフレクションとフリーインタラクションを行いました。

8.1.5.　8月19日 (5日目)

サマースクールの中間地点となる5日目にはセミナーは行なわれず、午前からGRIPSにて自己分析ワークショップが、午後にはタレントショー、ホームカミングディナーが行われました。自己分析ワークショップは、HLABアドバイザーであるアゴス・ジャパン代表取締役の横山匡氏のご協力をいただき自分の「強み」について考えました。タレントショーでは高校生と大学生が個々の特技・才能を披露しました。また、ホームカミングディナーでは高校生がHLAB過去参加者と交流する様子が見受けられました。

8.1.6.　8月20日 (6日目)

この日から、後半セミナーが始まりました。昼食時には、高校生から関心のあるテーマを募集し、そのテーマのグループに分かれ昼食をとるテーマランチという企画を行いました。「原発問題」といった社会問題から、「男子校」というような身近な話題まで、高校生の興味関心に基づいてざっくばらんに語り合う時間となりました。その後はハウスごとに分かれ、これまでの過去を振り返るPluralismという企画を行いました。これまで経験した辛かったこと、悩んできたことを共有することで、ハウスの仲間の絆がさらに深まる1日となりました。

8.1.7.　8月21日 (7日目)

サマースクール後半のセミナーもあっという間に半ばにさしかかり、参加者内での発言もより活発になってきました。午後には六本木アカデミーヒルズにて、『賢慮のリーダー』を題材に、ハーバード・ビジネス・スクールの竹内弘高氏にご講演をいただきました。フォーラム終了後は、本郷周辺のレストランにてハウス毎に夕食を取り、おいしいご飯と共に、この家族のような仲間たちのあたたかさをしみじみと感じました。夕食後は鳳明館に戻り、ハウス毎の一日の振り返りである「リフレクション」と、4回目にして最後となる「フリーインタラクション」を行いました。

8.1.8.　8月22日 (8日目)

受講する全てのセミナーを修了した参加者は、午後は銀座の Apple Store へ向かい、Apple Film Making Workshop を行いました。約 1 時間の動画編集講座を受けた後、サマースクールの集大成として、期間中の様々な体験や学びをメッセージとして込めた 3 分程度のムービーをハウス毎に作り上げました。完成したムービーの上映会では、Seminar Leader から高校生へのメッセージが送られ、高校生、大学生共に涙を流す場面が見られました。濃密な8泊9日を短いムービーにまとめることに苦労しているようでしたが、ハウス毎で一丸となって創作・活動を行う最後の機会となったこのワークショップは、サマースクールを振り返り、また参加者自身の成長を体現する機会となりました。

8.1.9.　8月23日 (最終日)

8泊9日を過ごしてきた宿である鳳明館に別れを告げたのち、開会式、フォーラムやワークショップの会場として利用されてきた政策研究大学院大学の想海樓ホールにて閉会式を行いました。実行委員長の野村による挨拶から始まった閉会式では、まずサマースクール関係者・支援者からのお言葉をいただきました。続いて Seminar Leader、House Leader、高校生のスピーチを経て、ハウス毎に大学生から高校生へのメッセージが送られました。そして最後には「メモリアル」という形で8泊9日を通して芽生えたそれぞれの思いを全体に共有する機会が設けられ、それぞれの思いを伝え合い、HLAB2014 は終了しました。

8.1.10.　全体タイムライン(右ページ参照)

8.2.　リベラルアーツ・セミナー

8.2.1. リベラルアーツ・セミナーとは

各セミナーは、1時間30分のセッションを3日間、計4時間30分で構成され、サマースクール前半と後半の2部構成で行われます。読み物等の事前課題、論文作成などの事後課題も含め、ハーバード生と日本人大学生の手により設計されます。高校生はハーバード生に提供される23種類のセミナーから、4つを選択し、課題や少人数でのディスカッションに取り組みました。セミナーは全て英語で行われますが、日本語、英語が堪能な日本人大学生である House Leader がディスカッションに参加し、高校生の学びのサポートを行います。

8.2.2. セミナー 一覧

1. Social Psychology
   -Alice Jeon and Tasuku Takeuchi
2. Why Should We Help Other People
   -Anna Gomez and Mariko Inokuchi
3. The Past, Present and Future of Space Exploration
   -Ben Betik and Nozomi Honda
4. The Art of Event Planning
   -Claudine Cho and Kan Yamane
5. A Look at Energy in a Modern-Day World
   -Eesha Khare and Asuka Tomoda
6. Theory of Technology Transfers Between Developed and Developing Countries
   -Elaine Cheng and Yuka Takabayashi
7. Becoming Steve Jobs: How Enterpreneurs Come Up with Great Ideas
   -Gorick Ng and Ayane Shiga
8. Don't Let the Media Control You!
   -Hao-Kai Pai and Shiori Asakura
9. Street Fighting Physics
   -Jamie Ryan and Ayaka Misono
10. Introduction to American Parliamentary Debate
    -Joy Jing and Chiaki Furihata
11. How Can I Convince My Mom to Buy Me an iPhone 5?
    -Joy Hui and Natsumi Bamba
12. Stress and Diseases
    -Justin Lo and Taiki Goto
13. Forgotten but not Abandoned: A Brief History of Japanese
    -Kathy Tran and Azumi Naruse
14. Philosophy of Artificial Intelligence
    -Michael Ma and Moe Ishihara
15. The Art of Storytelling
    -Min-Woo Park and Mayu Yoshida
16. Learnign to Count: A Look into Probability
    -Patrick Xu and Marina Nakamura
17. Reading the World Around You: Introduction to Lietrary and Cultural Theory
    -Rachel Thompson and Mihoko Yagi
18. Food Science
    -Sam Jiang and Rika Hayashida
19. Social Psychology
    -Sebastian Devora and Nozomi Handa
20. Bioethics
    -Steve Buschbach and Sorata Watabae
21. What Happens When We Type in "google.com"
    -Tianyu Liu and Lillie Tsunashima
22. Tech Start-Ups: Success, Failure, and the Future
    -Andrew Vincent and Yutaro Nishibori
23. Think Like an Architect
    -Yufeng Zheng and Taiki Nakane

8.1.10.　全体タイムライン

日程	8月15日		8月16日		8月17日		8月18日		8月19日	
曜日	Fri		Sat		Sun		Mon		Tue	
6:30										
7:00			起床		起床		起床			
7:30			朝食・準備		朝食・準備		朝食・準備			
8:00									起床	
8:30			セミナー	鳳明館	セミナー	鳳明館	セミナー	鳳明館	朝食・準備	鳳明館
9:00										
9:30									移動	
10:00										
10:30									自己分析WS	GRIPS 教室
11:00	受付	GRIPS								
11:30	顔合わせ	教室								
12:00	開会式	GRIPS ホール	昼食		昼食		昼食			
12:30										
13:00	アイスブレイク	GRIPS 教室	移動		移動		移動			
13:30										
14:00			フォーラム 遠藤謙氏	GRIPS ホール	フォーラム 松田悠介氏 吉岡利代氏 朝比奈一郎氏	GRIPS ホール	フォーラム ① Ms.Kathy Matsui ②村山斉氏	アーク ヒルズ		
14:30										
15:00									移動	
15:30										
16:00	Keynote Speech	GRIPS ホール							Talent Show	GRIPS ホール
16:30										
17:00	Welcome Dinner	GRIPS 食堂	移動						移動	
17:30										
18:00			自由時間	鳳明館			移動		Homecoming	GRIPS 食堂/教室
18:30					移動					
19:00	移動						夕食	本郷 周辺		
19:30			夕食		夕食		移動		移動	
20:00										
20:30	リフレクション /自由時間	鳳明館	リフレクション/ 自由時間	鳳明館	リフレクション /Free Interaction	鳳明館	リフレクション /Free Interaction	鳳明館	リフレクション/ AppleWS 企画紹介	鳳明館
21:00										
21:30										
22:00										
22:30										
23:00	就寝									

日程	8月20日		8月21日		8月22日		8月23日		日程
曜日	Wed		Thu		Fri		Sat		曜日
6:30									6:30
7:00	起床		起床		起床		起床		7:00
7:30	朝食・準備		朝食・準備		朝食・準備		朝食・準備	鳳明館	7:30
8:00									8:00
8:30	セミナー	鳳明館	セミナー	鳳明館	セミナー	鳳明館			8:30
9:00									9:00
9:30							移動		9:30
10:00									10:00
10:30							閉会式	GRIPS ホール	10:30
11:00									11:00
11:30	テーマランチ	本郷 周辺							11:30
12:00			昼食		昼食	鳳明館			12:00
12:30									12:30
13:00	移動		移動		移動		軽食	GRIPS 食堂	13:00
13:30									13:30
14:00	自由時間	鳳明館	フォーラム 竹内弘高氏	アカデ ミーヒルズ	Apple Film Making WS	Apple Store, Ginza			14:00
14:30									14:30
15:00									15:00
15:30	移動								15:30
16:00									16:00
16:30	自由時間								16:30
17:00	夕食								17:00
17:30			移動		移動				17:30
18:00	Pluralism	鳳明館			The Last Dinner	セルバン テス文化 センター			18:00
18:30			夕食	本郷 周辺					18:30
19:00									19:00
19:30			移動						19:30
20:00					移動				20:00
20:30									20:30
21:00	Free Interaction		リフレクション /Free Interaction	鳳明館	リフレクション /自由時間	鳳明館			21:00
21:30									21:30
22:00									22:00
22:30									22:30
23:00	就寝								23:00

8.2.3.　セミナー紹介

Seminar : Forgotten but not Abandoned: A Brief History of Japanese

Seminar Leader：Kathy Tran (Harvard University '16 Social Anthropology and Linguistics 専攻)
House Leader：Azumi Naruse (International Christian University '16 Education and Development Studies 専攻)

「日本では大多数の人が無宗教である。」しかし、それは本当でしょうか。本セミナーは、アニメや映画などのメディアを通じて、日本の現代社会のなかに生きる宗教について客観的に考えるセミナーです。事前課題として、参加高校生は、宗教は持たないものの困った時に神に縋る日本人の性質について書かれた英語の文献を読むことと、宗教のメッセージが隠されているアニメを鑑賞するというものが出ました。一日目は、日本に存在する3つの主要な宗教として、仏教、神道、キリスト教の教義や世界観をそれぞれ対比させながら学びました。仏像の印相の意味やジブリ映画に隠された神道のモチーフなど、知っているようで知らなかった3つの宗教を学問的に文化的に読み解くことができました。二日目は、一日目で得た基礎知識を使い、歴史を切り口に「なぜ日本人は宗教に対する信仰がそれほど強くないのか」という問いをクラスで深めました。戦時中に政治のプロパガンダとして使用された宗教や、地下鉄サリン事件など日本の歴史を振り返りながら、移り変わる宗教の役割について学びました。
最終日は、現代に登場した新興宗教について主に学びました。いくつかの新興宗教を取り上げ、基礎知識を得た後に、「どうして新興宗教は登場し、人々はそれら信じるようになったか」という問いに対して皆で意見を交わしました。
「忘れ去られた、しかし、捨てられてはいない」。このセミナーのテーマは、まさに日本における「宗教」を表しています。受講した高校生からは、「これまで宗教に関してあまり深く考えたことが無かったので興味深かった」や、「自分は宗教と全く関係ないと思っていたが、好きなアニメを含め自分の周りに宗教的な考えや文化がたくさん存在していることに気づいた」という感想をもらいました。特定の答えの無い「宗教」というトピックを扱った本セミナーでは、「なぜこうなのか？」を常に考えるディスカションベースの授業が展開されました。初日は少々高校生も緊張している様子でしたが、最終日には自分の意見を堂々と発表し、白熱した議論が行われたことも非常に印象的でした。

Seminar : Don't let the media control you.

Seminar Leader：Hao-Kai Pai (Harvard University '16 Economics 専攻)
House Leader：Shiori Asakura (International Christian University '16)

人は日々、どのように「情報」を得ているでしょう。テレビで耳にするもの、新聞から読み取るもの、ラジオ、本、インターネット…。私たちの身の周りにはあらゆる「メディア」が存在します。しかし、それらの情報をどう受け取るかによっては、気付かぬ内にメディアの意向に沿った価値観、知識を構築しているかもしれません。この授業では、テロリズムを例に考えました。みなさんは「テロリズム」と聞いたときどの地域を思い浮かべるでしょうか。またどういった人たちがテロリストになっていると考えますか。この質問に対し、多くの生徒が地域を中東と答え、生活水準が低く、教育をあまり受けていない人々がテロリストになるのだろうと推測しました。しかし現実にはインドでのテロ事件が最も多く、生活、教育水準ともにある程度高い人々によってこういった事件は引き起こされています。私たちが常識的に考えていることも、日々受け取る情報がこうした誤解や事実とは異なった認識となり得ている―そのことを実際に高校生に体験し、認識してもらうところからこの授業は始まりました。
その後は２日目、３日目にかけて、メディアが発信する情報にどのような「偏り」が見られるのか、そしてそれらの偏りをどのように見抜くのかといった着目すべきポイントを、様々な例を用い細かく説明しました。途中、英語での説明が聞き取れない高校生も見受けられましたが、自ら積極的に質問をし、分からないと感じる箇所を言葉にしていました 。それに対し、周りの高校生も自発的に説明をして助け合うなど、インプットの多い授業内容でありながら発言の多く見られるセミナーとなりました。
さらに最終日には、それまでの授業で得た知識をもとに、同じ日付の紙面を新聞社ごとに比較し、情報の偏りが見られる箇所、各新聞社の傾向等について議論を行いました。 活発な意見交換が行われ、新聞に掲載されている事象以外についても自ら議論を行い、納得するまでとことん話し合う様子が見られました。
私たちの身の周りには情報が溢れています。「その中で情報の渦に巻き込まれ、自分の立ち位置を見失うことは簡単だと感じた」そう口にする高校生がいました。「何を信じ、何を疑うのか、自分自身の判断基準をしっかり持っておきたい」、「新聞を読む中で見える世界が変わった」など、セミナーを終え、様々な声が上がりました。授業内だけではなく、彼らが日常に戻ったとき効力を発揮してくれる、そんなセミナーになってくれていることを願っています。

8.3. フォーラム

8.3.1. フォーラムとは

政治、経営、物理、芸術等様々な分野で社会のトップリーダーとして活躍されている有識者の方々をお招きし、御自身のライフストーリーを含む「今、高校生に伝えたいこと」をテーマに講演と質疑応答を行いました。各日の午後に行われ、政策研究大学院大学、アークヒルスズクラブ、アカデミーヒルズ等の施設を利用しました。講演で語られる彼らの経験や、熱いメッセージを通して、参加者にとって新しい価値観との出会いや将来を考察する契機となることを目的としています。また、ご講演頂いた後に、高校生・大学生と講演者の対話を意識した長めの質疑応答や、また講演者と同じ目線で交流・議論できるようなフリーインタラクションを設計する等、高校生・大学生・ハーバード生といった3つのアクターが能動的に参加し、対話を行うことが可能となる学びの場を創造することを目指しました。

8.3.2. 黒川清氏基調講演 / 政策研究大学院大学アカデミックフェロー

【日時】8/15(金) 16:00-17:00
【場所】政策研究大学院大学
【講演概要】現代の社会が抱える闇と光、グローバル化が加速するこの世界で我々はどう生きるかというテーマで、黒川様の鋭い考察を伺う一時間でした。ご自身のライフストーリーや『The Matrix』(1999) 等の馴染みの深い映像を交えての興味深いお話を聞くことができました。

8.3.3. 遠藤謙氏 / ソニーCSL 研究員

【日時】8/16(土) 14:00-17:00
【場所】政策研究大学院大学
【概要】前半は、遠藤様が取り組まれている義肢についての講義をしていただきました。健常者と障碍者の違いとは何か、科学技術ができることは何か、という問いについてを考える講演でした。後半は、「自分ならどんな義手・義肢を作るか」というテーマでワークショップを行いました。遠藤様のファシリテーションの下、様々な意見やアイデアが飛び交う和気あいあいとした雰囲気となりました。

8.3.4. 日本語フォーラム
朝比奈一郎氏 / 青山社中株式会社 筆頭代表
松田悠介氏 / Teach For Japan代表理事
吉岡利代氏 / 国際人権 NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)上級プログラムオフィサー

【日時】8/17(日) 14:00-18:30
【場所】政策研究大学院大学
【概要】フォーラムでは通常英語での講演、質疑応答を原則としておりますが、英語を得意としない高校生を考慮し、本講演では日本語を使用言語といたしました。第一部では、ご自身の高校生活や、海外留学を決意された理由、どういった経験が現在のキャリアに繋がっているか等のライフストーリーについて、おー 人ずつ、写真やエピソードを交えながらご講演いただきました。第二部では、お三方によるパネルディスカッション形式で、世界で生きるということ、世界で活躍できる人材の意味や、現在のお仕事で果たそうとされているミッション、その決意に至るまでの問題意識など、高校生の今後の人生観を揺さぶるような示唆に富んだお話を賜りました。第三部では、グループQ＆Aセッションが行われました。少人数グループでの質疑応答の時間は、進路において様々な疑問、悩みを抱える高校生にとって大変貴重な機会となりました。
【高校生の声】私はリーダーシップが生まれつきの能力でも地位でもないということが印象に残っています。小さい頃から内気で、人前に立って誰かを救うことができる人に自分はなれないと思っていましたが、思いを強く持って頑張りたいです。小さい頃の逆境を初め、数々の困難に立ち向かいながら、自分の軸を忘れずに挑む姿に感銘を受けました。自分の強みを理解し、当事者意識を持てるよう、自分の情熱を捧げられることを見つけた。

8.3.5. Kathy松井氏 / ゴールドマン・サックス証券株式会社

【日時】8/18(月) 14:00-15:00
【場所】アークヒルズ
【概要】カリフォルニアの農園で育った生い立ちから今に至までの壮大なライフストーリーを語っていただきました。情熱的で、分かりやすい松井様のスピーチでは、「Ask a lot of questions to myself」「Passion is all about life」などの金句が次々と飛びで、高校生達も熱心に聞きいっていました。
【高校生の声】若いうちに色々とやるべきことが見えてきました。自分が今いる環境をせいいっぱい活かしていきたいと思います。I was inspired by the idea of 'Womanomics'. Society needs women's power. I would like to make world where women can lively work.

8.3.6. Harvard生対談　Eesha Khare / Gorik Ng

【日時】8/18(月) 15:00-16:00
【場所】アークヒルズ
【概要】本企画はセミナーリーダーとして関わっているハーバード生によるパネルディスカッションで、高校生の進路選択を広げることを目的に行われました。二人のハーバード生の

豊かな課外活動暦や、キャリアデザインに対する考え方は日本人の高校生にとっては新鮮であり、刺激になったようでした。Q＆Aセッションで積極的に質問を投げかけている姿が大変印象的でした。

8.3.7. 村山斉 / 東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構初代機構長

【日時】8/18(月) 16:00-18:00
【場所】アークヒルズ
【概要】第一部は宇宙を構成するダークマターやダークエネルギーについて、華麗なプレゼンテーションを行っていただいたあと、第二部として御自身のライフストーリーについて、なぜ理論物理学者を目指すようになったかを含めて語っていただきました。

8.3.8. 竹内弘高 / ハーバード大学ビジネススクール教授

【日時】8/21(木) 14:00-17:00
【場所】アカデミーヒルズ
【概要】御講演の前半部分は、ご自身のライフストーリーを様々な観点から語っていただき、どのように人生を選択するか、キャリアを作っていくかについて熱い思いをぶつけていただきました。後半では、竹内教授が提唱される「賢慮のリーダー」について、ハーバードビジネススクールで行われている授業スタイルでご講義いただきました。高校生、ハーバード生共に白熱した議論に夢中になりました。

8.4. ワークショップ

8.4.1. ワークショップとは

ワークショップとは、高校生が主体的に関わることによって、周りの参加者との交流を促進し、また自分を見つめ直す機会となる学習プログラムです。セミナーやフォーラムなど、インプットの多い HLAB における貴重なアウトプットの場として、高校生にとって有意義な学びの場で あるとともに、積極的に参加して楽しめる場でもあります。本年度の HLAB では、以下のワークショップが催されました。

8.4.2. アイスブレイク・ワークショップ

【日時】8/15(金)
【会場】政策研究大学院大学
【概要】高校生参加者を迎え、全員での初の顔合わせとなったサマースクール初日、初対面の参加者同士の緊張(アイス)を解く(ブレイク)ことを目的としたワークショップが行なわれました。本ワークショップは 3部構成となっており、第1部として、ハウス間の対戦要素を含んだレゴブロックの高積みを行い、第2部では自分をレゴブロックを使って表現をするという自己紹介を行いました。そして、第3部では全参加者がなぜサマースクールに参加したかという想いをお互いに語り合う場を設けました。それぞれ、日米大学生と高校生が、その後の9日間の行動を共にするハウスの仲間たちと、言語や年齢の壁を越えた交流を始める機会となりました。

8.4.3. 自己分析・ワークショップ

【日時】8/20(水) 11:00-15:00
【会場】GRIPS(政策研究大学院大学)
【概要】 HLABアドバイザーであるアゴス・ジャパン代表取締役の横山匡様のご協力の下、自己分析ワークショップが行われました。自分の強みや弱みに加え、今まで自分が培ってきた価値観を理解し、未来に向けて歩みだすきっかけとすることを目標としました。前半のプログラム中のセミナー、フォーラムや参加者との会話の中で得たインプットをいったん整理する時間となり、高校生からは、周囲の多様な世界だけでなく、過去、現在の自分を見つめることも大切であると実感した、などの感想がありました。

8.4.4. Apple Film Making Workshop

【日時】8/22（金）13:30-16:30
【会場】Apple Store Ginza
【概要】本ワークショップでは、Apple Store Ginzaのご協力の下、参加高校生が各ハウスに分かれ、期間中に撮影した写真や映像を使用し2~3分程のムービーを作成・上映をしました。ムービー作成の技術講習を受けた後、ハウスごとに編集、最後に上映会を行う3部構成のワークショップでした。サマースクール全体を振り返る良い機会となりました。

8.5. その他イベント

8.5.1. 開会式

【日時】8月15日12:00-13:00
【場所】政策研究大学院大学　想海樓ホール
【概要】全国、世界各地から六本木に集まった80人の高校生を出迎える最初のイベントです。共同実行委員長である野村善文と村上理香子によるスピーチに始まり、式の中では、ハーバード生代表Justin Lo、高校生代表の後藤彩乃に「HLABにかける思い」を語ってもらいました。加えてHLAB スポンサー・三菱商事株式会社特別顧問の槙原稔氏、HLABのアドバイザーである横山匡氏からもお言葉を頂戴し、式を更に盛り上げていただきました。開会式の最後には一人一人の想いを風船に込めて放つオープニングスパークを行い、明るく和やかな雰囲気の中、そこから始まる8泊9日に想いを馳せました。

8.5.2. リフレクション

リフレクションは一日を振り返り、「経験」や「気づき」を「学び」に落とし込むことを目的としています。ハウス単位で毎晩行われ、高校生と大学生が年齢、国籍の枠を超えて意見交換します。セミナーやフォーラムの中での気づいたことに加えて、自分の過去の経験や将来の夢について、活き活きと話す高校生も見受けられました。対話を重ね、相互理解を深めることにより、ハウス内の絆が密になっていきます。

8.5.3. タレントショー

【日時】: 8月19日(火) 15:00-17:30
【会場】: 政策研究大学院大学　想海樓ホール
【概要】: 本企画はそれぞれの特技や才能を生かしたパフォーマンスを通じて他のアカデミックなコンテンツからは見ることのできない参加者の一面を知ることを目的としています。パフォーマンスは、ダンス、楽器の合奏、漫才、歌、朗読、ルービックキューブなどどれも個性に溢れたものばかりで、約2時間の間、会場となったGRIPSホールは熱気と歓声に包まれました。「タレントショーが終わった後、急に話しかけてくれる人数が増えた」「サマースクール後半にむけて参加者の新しい一面を見ることができ、より深いコミュニケーションに役立った」とお互いのより深い理解の助けになったという声の他、「ステージで一人で歌ったことが自信につながり、その後色々なことに積極的にチャレンジできるようになった」という自分自身の成長に関する感想も聞かれました。世界各地から集まったサマースクールの仲間の声援の中でステージに立つ経験は、高校生をさらにひとまわり成長させるものとなりました。

8.5.4. ホームカミングディナー

【日時】: 8月19日(火)　18:00-20:00
【会場】: 政策研究大学院大学 会議室A/B/C
【概要】: 2011年度から2014年度までのサマースクール参加者が一堂に会し互いに交流するホームカミングディナーが開催されました。4年間で東京だけでも320人もの高校生が参加した計算になるHLABサマースクールにおいて、卒業生（アラムナイ）との交流は新たな視野を広げる第一歩となります。立食形式の食事を囲みながらのアイスブレイクゲームや歓談の時間を通して新たな繋がりが沢山生まれていました。

8.5.5. フリーインタラクション

【日時】:8月17日(日)、18日(月)、20日(水)、21日(木) 夜
【会場】:鳳明館森川別館　大広間
【概要】:社会で活躍されている方々をゲストとしてお招きし、高校生と膝を交えて語り合う場の提供を目的として行われました。高校生は普段なかなか接することのできない方々との対話を通じて、興味や関心を深めると共に、自分自身が抱えている疑問や将来について考えました。ビジネスや政治、行政など様々な分野で活躍されている約40名のゲストにお越し頂きました。「働くことの意義とは」、「留学したいけど、どうすればいいのか分からない」といった率直な思いや疑問と、それを真摯に受け止めてくださるゲストの皆さんの御陰で、終始活気のあふれる企画となりました。

8.5.6. Pluralism

【日時】8 月 20 日（水）　18:30 ～ 20:30
【会場】鳳明館
【概要】サマースクールも後半に入った 6日目。陽も落ちて、薄暗くなり始めた夕方18時30分。部屋の真ん中には、ぼーっと灯る蝋燭。そこに集まるのは、同じハウスの仲間たち。サマースクールが始まってからの戸惑い、前日に行った自己分析ワークショップで改めて気づかされた自分の中のコンプレックス、これまでなかなか人には話せなかった辛かった経験や秘密、など。高校生も大学生も関係なく、8泊9日間を共に過ごす家族のような仲間“ハウス”で、もっと深い生の声を語り合い、わかち合う場を設けました。
【高校生の声】
・たったの数日間で、ここまでの話ができる深い信頼関係を結べた仲間に出会えたのは、初めてだった。
・気が付いたら涙していた。自分がこれまでいかに恵まれた環境にいたかを思い知り、もっと周りの人に感謝しなくてはと感じた。

8.5.7. 閉会式

【日時】8月23日10:30-13:00
【場所】政策研究大学院大学　想海樓ホール
【概要】サマースクールの集大成となる閉会式は、高校生・ハーバード生・日本人大学生がサマースクールで得た学び・思いの丈を共有する場です。HLABのアドバイザーを務めて頂いている竹内弘高氏による熱いメッセージに始まり、ハーバード生代表のMin-Woo Park、ハウスリーダーの塘田明日香、高校生代表田中翔大と片山玲美のスピーチと続きました。その後、ハウス毎に大学生がステージに上がり、高校生の名前を一人一人読み上げる卒業式が行われました。9日間を共に過ごしたハウスの大学生によるメッセージに多くの高校生が涙を流し、別れを惜しんでいました。そして恒例である'メモリアル'という時間では、会場の参加者が学年や国籍といったボーダーを超え、HLAB を通して感じた想いを皆に共有した後、期間中のハイライトをまとめたクロージングムービーを見て期間中の出来事に想いを馳せながら、8泊9日のサマースクールの閉会の時を迎えました。

8.6. 参加者について

8.6.1. 参加者内訳

＜性別＞
男子　41名
女子　38名

＜学年＞
1年　25名
2年　36名
3年　18名

＜居住地＞
北海道・東北地方　5名
関東地方　48名
（うち東京27名）
北陸・東海地方　6名
近畿地方　7名
中国・近畿地方　6名
九州　2名
アメリカ　1名
イギリス　2名
ヨルダン　1名
中国　1名

＜高校区分＞
国立　8名
公立　14名
私立　50名
海外高校　7名

＜文理＞
文系　44名
理系　33名
未定　1名

8.6.2.高校生の声

将来の夢についてたくさんの人と話をしたことが一番印象に残っています。私が今まで考えたこともなかったような、全く違う夢を持っている人がたくさんいました。自分が知らない世界の話を聞くことはおもしろくて、“教育”という一つの分野にしか興味がなかった私にとってとても刺激的でした。夢を持ったきっかけも、バックグラウンドも違うけど、話を聞いていて共通していたのは夢に向かう姿勢や気持ちです。夢について語る人はみんなキラキラしていて、それは高校生や大学生だけでなくフリーインタラクションでお話させていただいた大人の方も同じでした。私は今まで夢を叶えることがゴールだと思っていました。しかし、夢を叶えてからも次の新たな夢を持っているたくさんの人に出会い、夢についての考え方が変わりました。

——

“常に夢を持ち続けていたい”
夢を叶えることも大切だけど、新たなことに向かって努力し続けることの方が大切だと実感できた9日間でした。私はHLABを通して“世界と出会い、自分と出会う”ことができました。9日間の出来事を自分のものにするのには、まだまだ時間がかかりそうです。しかし、前を向いて、出会った自分自身と向き合っていきたいと思います。

8.6.3. ハウスリーダーの声

私にとってHLABは、自分自身を見直す場であり、かけがえのない仲間たちに出会う場でした。私は期間中、ハウスリーダーとして高校生と接する際に、価値判断をする場面に直面したり、自分自身を律したり、また一参加者として高校生や大学生と対話する際に、自分自身の想いを言語化したり相手の想いに傾聴したりする場面に幾度となく直面しました。そのよう機会は、私にとって、自分自身について様々な気づきを得るきっかけになったと考えています。そして、HLABで様々な学びを得、何よりHLABを楽しめたのは、偏に期間中に出会った高校生や大学生のおかげです。9日間同じ屋根の下で生活を共にし、様々な話をし、様々な苦楽を共にする中で築きあげた彼らとの絆は、私にとってHLABを通して得た宝物です。本期間は終わってしまいましたが、この絆は今後も続いていくような強い絆であると確信しています。このようにHLABは高校生参加者だけではなく、大学生の私にとっても貴重な場であったし、このような場を作り上げてくださった方々に心から感謝しています。

HLABは高校生が自分と向き合う場所だけでなく、それを支える大学生自身も自分の進路やこれまでの生き方を考えさせる場だと思いました。フォーラム・フリーインタラクションでの社会人の方々や、期間を通して出会う同世代の高校生から刺激を受けた高校生が自分と向き合い悩むプロセスを支えなくてはいけないが故に、高校生の一番近くで向き合える存在であるハウスリーダーが高校生に対して負っている責任の大きさを感じました。だがしかし、たった数年しか歳も違わず経験があまりない自分が、多様な高校生に対しどのようにして良いアドバイスができるかという部分で、過去の経験を話すことで精一杯になっている自分の無力さを痛感しました。ただ、その時に大学生も高校生と一緒になり、もう一度自分自身と向き合い、悩み抜くことで支える事もでき、そういった姿勢を持つ事の大切さを学びました。HLABはそういう姿勢を常に持ち続け、さらに高め合う、高校生だけでなく大学生も含めてそんな仲間とであうための「きっかけ」であると信じています。

8.6.4. ハーバード生の声

HLAB was a phenomenal experience. What makes HLAB so special is the people. The high school students are incredibly brilliant, curious, and enthusiastic. Their capacity to learn and to share and to dream never ceased to amaze me. And the Japanese university students are incredibly supportive and compassionate in working together with American university students to create the best possible summer program for the high school students. The conversations that I had at HLAB were genuine beyond explanation. I walked away from Japan feeling like I had made friends—no, brothers, sisters and family—to last a lifetime.

HLABでの経験と、そこでの人との出逢いはかけがえのない物です。日本中から集まった高校生は凄く知的好奇心豊かで輝いていて、なにより何事にも情熱的でした。彼らの学びの貪欲さと、そしてそれを夢を描く姿に感激を受けました。加えて、日本の大学生は僕達ハーバードの学生に対して本当に協力的で、「高校生の為に最高のプログラムを創る」という想いのもと歩みを共にしました。HLABでの中で交わした一言一言が僕に与えた影響は言葉にはできそうにありません。異国の地日本を去る時の感覚は、ただの友達ではなく、人生を通しての兄弟ともう一つの家族に後ろ髪を引かれるような、そんな不思議な感覚でした。

“Where diversity meets learning.”

This phrase, known as the HLAB Tokyo slogan, truly embodies the spirit of this year’s conference as a diverse group of people from all over the world for a little over a week of intensive learning about the world, life, and each other.In 9 short days, Homeikan (our host site) became an international exchange of not only knowledge, but also dreams, passions, and life learnings. As college students, we brought our academic knowledge to share with high school students, but as older kids, we brought our diverse range of life experiences and interests to help mentor them in thinking about their future. In return, we received just as much, if not more, from the high school participants, who enthusiastically opened up their hearts and minds to us. Not only did they step out of their comfort zones to participate in college-level seminars taught in a foreign language, but they also shared their lives and dreams with us. That's when I realised the atmosphere at HLAB was charged with enthusiasm for life and determination for challenging one’s limits. Even though I graduated earlier this year, I still remain incredibly inspired to be the best that I can be by the college and high school students I met and greatly appreciate this once-in-a-lifetime opportunity to participate in such an exchange of ideas and passions.
it feels as if I have gained a supportive family from spending a couple days with a group of absolute strangers – to quote an SL from last year, “I have never felt so welcomed at a place I do not belong.”
Where diversity meets learning.

世界中から多様なバックグラウンドを持って集まり、世界・人生・お互いの事を学び合うこの9日間の経験はこのスローガンに集約されると思います。9日間を通して鳳明館(宿泊地)は、知識だけではなく、夢や情熱の様な人生観が国のボーダーを超えて飛び交う国際的な場に変化していきます。当然僕たちは、大学生として学術的な知識を高校生に教えますが、それ以上に人生の先輩として、僕らの人生経験を伝える事で、高校生の将来設計にメンターとして近い距離で関わっていきます。ただなによりも、心を開いて僕らと接してくれる高校生から、僕たちハーバード生が受けた刺激というのも忘れてはいけません。というのも、期間を通して、オールイングリッシュで行われる大学レベルの授業において、一歩自分の壁を飛び越えてみようと頑張る姿や、彼らが夢や自分の人生について語る彼らの姿とパワーを目の当たりしていきます。ふとしたときに、一人一人が自分の夢と限界に挑戦し続ける想いに溢れた空間に、自分がいる事に気づき、それこそがHLABなのだと感じるわけです。僕は既にハーバードを卒業していますが、HLABで出会った高校生・大学生から受けた刺激、そして、なによりもこの想いと情熱が飛び交う場での "一期一会" の出会いに感謝してもしきれません。
HLABは全く出会った事のない人たちと、一生支え合える家族になれるような、そんな素敵な経験でした。昨年度のハーバードの参加者の言葉を借りますが、"自分がいるはずのない所に、こんなに強く繋がってたいと思った事なんてない"そんな素敵な夏を過ごせた事に感謝しています。

8.6.5. 実行委員の声

“Life-changing experience.”
という英語の意味も分からずに、実行委員になったのは、昨年の11月だった。実行委員の中で唯一海外経験が無く、「英語ができないロールモデル」としてのスタートだった。「Nandeyanen!」と覚えたての日本語で挨拶代わりに声をかけてくれるハーバード生や、「どうして大学に行くの？」と素朴な疑問をぶつけてくれる高校生に囲まれた9日間は、18年間を三重県の海と山しかない田舎町で過ごした自分にとっては、刺激が多すぎる環境だった。そんな場に身を置き、気がついたことが一つある。それは「自分らしくあることの大切さ」だ。周りの環境がどう変わっても、自分らしく振る舞うこと。それが大切なことだと気づかされた。一人の高校生がタレントショーという企画の中でIdina Menzelの「Let it go」を歌っていた。自分の「ありのままの姿」を受け入れてくれる、それがHLABであり、そこで出会った仲間達だった。ここで出会えた仲間に感謝したい。HLABでの9日間は私にとってまさに“Life-changing experience”だった。

——
「世界と出会い、自分と出会う」。
これは今年度のHLAB Tokyoが掲げたスローガンですが、果たしてその場をどう実現させるのか、実行委員として悩みに悩んだ半年間でした。14名の熱い思いを持った仲間とは、時に意見の食い違いもあり議論が長丁場になることも多々ありましたが、最後には思いを1つにして今年のHLABを作り上げることが出来ました。この仲間との出会いの他にも、参加高校生の「目の色が変わる」「人生が変わる」そんな瞬間を共に過ごせたことも何よりの幸せです。

8.7 終わりに

以上、本報告書にて HLAB 2014 のプログラム内容をご報告させていただきました。HLABに参加した79名の高校生は、所属校・出身地域・性別・年齢...といった様々なボーダーを超えて生まれた交流を通して、様々な気づきや学びとともに晴れやかな表情で帰路につきました。ただ、HLABでの経験はあくまでも彼らの長い人生のなかでの一つのきっかけでにしかすぎません。この経験が新たなステージでの活躍に繋がる第一歩である事を信じております。

改めまして、主催団体である IMPACT Foundation Japan の皆様、ご共催頂きました政策研究大学院大学の皆様、ご協賛いただきました三菱商事株式会社・P & E Directionsの皆様、メディアスポンサーとしてご後援いただきました日本経済新聞社の皆様、ご助成いただきました米国大使館の皆様に加え、アドバイザーとして実行委員会をサポートしてくださいました黒川清氏、竹内弘高氏、横山匡氏、期間中にフォーラムスピーカーとしてご来場いただきました皆様方、フリーインタラクションの中で高校生に貴重なアドバイスを与えてくださったゲストの皆様方に、実行委員一同、心より感謝申し上げます。今後とも、変わらぬご支援、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

HLAB 2014 Tokyo 実行委員会一同

9. 小布施
9.0. 実行委員長 挨拶

さあ、旅をはじめよう。「あたりまえ」から踏み出す夏を、小布施で。

2013年3月。高校を卒業したばかりの私は、衝撃的な出会いに恵まれました。隣県の群馬に生まれ育ちながら、寡聞にしてその存在を知らなかった「小布施」との出会いです。「小布施でHLABが開催される」。その一言で、受験を終えエネルギーを持て余していた私の心に、えもいわれぬ期待と好奇心が燎原の火のように広がっていたことを、今でも覚えています。2012年8月に、受験を控えた高校3年生として参加したHLABは、僕の人生をより豊かにしてくれるヒントに満ち満ちた経験でした。いまもなお密なやり取りを続けている同期の参加者。いまなお尊敬の念を感じずにはいられない大学生実行委員・TF（当時のHLの呼称です）・ハーバード大生。幸運にも大学に進学できたからこそアカデミックな成果を世に還元していきたい、そんな思いが芽生えたのも、一足早く学問の世界で活躍する大学生との、他愛もないやり取りがあってこそのものでした。

「そんなHLABを、小布施で。しかも聞くところによれば、小布施は人口1万人余りの、信州一小さい町ということじゃないか」。地方初の開催となるHLABがどんな展開を見せていくのかを、この目に焼き付けたいという知的好奇心。高校生を取り巻く閉鎖的な環境や、限られた選択肢の中から進路選択をせざるをえない（ように錯覚させられる）高校の進路指導体制といった問題は、私自身の故郷である群馬にも共通する課題であり、それらに対して一大学生として取り組みたい。自らがHLABで得た経験を次の世代に還元したい。心の中でこうした想いが重層的に響き合い、2013年3月、実行委員として小布施 × Summer School by HLABに携わることを決意しました。

それから早くも一年半が過ぎ、実行委員長として迎えたサマースクール二年目は、私にとってもまさに学びの場でした。2014年8月、16人の海外大学生、33人の日本人大学生、そして主役の50人の高校生が小布施に集いました。こんなにも多様で、こんなにも個性的なメンバーが、小ささは信州一だけれど、その面積に収まりきらないほどの魅力でいっぱいの小布施という地で邂逅したこと、それ自体が奇跡でした。

サマースクールがいかなるものだったのか、サマースクールを通し高校生が何を感じたのか、こうした詳細は実行委員ひとりひとりが自らの実感を言の葉に落とした後節に譲ります。実行委員ひとりひとりが紡ぎだした言葉を通じ、サマースクールの様子が少しでも伝われば幸いです。

小布施 × Summer School by HLAB　実行委員長
佐々木 弘一

9.1. タイムラインと振り返り

9.1.1.　8月14日 (1日目)

初日は、現地集合する高校生と、東京からバスで向かう高校生とに分かれ、6泊7日を過ごすことになる小布施に向かいました。北斎ホールにて開会式を行い、その後講堂にてアイスブレイク・ワークショップを行いました。あいにくの雨模様もアイスブレイクの途中からは夏の太陽が顔を出し、栗ガ丘小学校のグラウンドでハウス毎に緊張をほぐすアクティビティーを楽しみました。夜にはウェルカムディナーを開催し、美味しい料理を堪能しながら、高校生・大学生が会話に花を咲かせました。

9.1.2.　8月15日 (2日目)

2日目のプログラムでは、高校生に「様々な世界と出会い、自らの中にある知の水平線を広げてもらいたい」という思いのもと、午前中のセミナーが終了した後に、様々な分野で活動している７名のゲストの方をお呼びしてフォーラムを開催致しました。フォーラムでは実際に実演を交えながら、「どのような活動をどういった思いを持ってされているのか」それぞれ10分程の講演にまとめてお話をしていただきました。また、壇上からの講演者の一方的な講話ではなく高校生との双方向の交流にすべく、講演終了後には座談会を設け、たくさんの質問や議論の飛び交う場となりました。フォーラムは、同時に町民の方にも足を運んでもらえるような開放企画とし、なるべく多くの方の目に触れるように町内各所に広報用のビラを作成し、設置させていただきました。夜の部では、場所を小学校の校庭に移し、町民の方による屋台や、鬼島太鼓の演奏、また昨年に引き続き愛知県三河市の伝統的な手筒花火を披露していただきました。お祭り終了後には、町立図書館であるまちとしょテラソにて講演者の方を始めとして、様々な社会人の方と自由に交流できるフリーインタラクションを開催しました。

9.1.3.　8月16日 (3日目)

3日目において最も重視したテーマは自己省察とハウス内での一体感の醸成です。まず午前中のセミナー終了後、株式会社ホワイトシップの講師陣をお招きして、創作活動と鑑賞活動を通して自身を分析するEGAKUワークショップを実施致しました。高校生や大学生たちはこのユニークな体験に初めは戸惑いながらも、絵を通じて自己と向き合い普段とは違う自分の一面を見つけることができたことに大変刺激を受けました。そして夜には自身のお気に入りの本を紹介するビブリオバトルがハウス対抗形式で行われました。各ハウスでは全員の前で発表をする代表スピーカーを選出し、ハウス内のメンバーが一体となってスピーチの戦略や応援の仕方に工夫を凝らしていました。終了後には互いの健闘を讃え合い、より確かで力強い絆が育まれたようでした。

9.1.4.　8月17日 (4日目)

4日目は「一歩踏み出す勇気を与え、自分らしい未来を描く」というテーマを掲げ、小布施町にいる「カッコいい」生き方をしている皆さんにインタビューをし、自分自身を見つめ直す企画を行いました。まず午前中に、「芸術新潮」の元編集長である松家仁之氏にお越しいただき、インタビューをすることの意味、具体的なやり方などをレクチャーしていただきました。午後には午前中に聞いたレクチャー内容を活かし、実際に町に出て町民の皆さんにインタビューを行いました。インタビュー後は、インタビューを通じて感じたことを決められた形式にそってアウトプットをしてもらいました。高校生たちは、それぞれの方の生き方や考え方に触れ、また、そうした方との対話の中で自分自身と向き合うことで、非常に刺激的な時間を過ごしていました。インタビューから帰ってきた後は、小布施の地元の方々のお家で、民泊を行いました。海外の大学生にとっては、初めての日本の田舎でのホームステイであり、また日本の高校生たちにとっても小布施のおもてなしの心を時間することができる非常に貴重な時間となりました。

9.1.5.　8月18日 (5日目)

5日目はセミナーの折り返し地点の日でした。高校生は前半に比べてより積極的に発言するようになったり高校生同士で協力しあったりする姿が見受けられました。またわからないことを恥ずかしがらずに質問したり、海外大学生に直接英語で理解しようとしている姿が印象的でした。また午後には高校生

が大学生に対して興味関心があることをセミナーを行なう時間を設けました。この企画は「高校生は学ぶ立場であるというサマースクールの当たり前を崩すこと」「最後まで責任をもってひとつの企画を行なう」ことを目的に実施しました。この大学生向けセミナーは英語実施し、これを準備する過程で物事を伝えるということや・自らが主体的に行動することを経験してもらいました。これらの経験は「大変だったものの貴重な経験だった」という感想が寄せられています。夕食は小学校の元PTAのお母様方に手料理を振る舞っていただきました。この食事では小布施ならではの食材に舌鼓をうつことができただけでなく、立食形式だったこともあり普段話すことのない高校生や大学生が交わる機会となりました。その後個々人が特技を披露するタレントショーが実施し、高校生と大学生の交流が多くもたれた1日でした。

9.1.6.　8月19日 (6日目)

6日目は全5回のセミナーの最終回、そして全日を通して行われたリフレクションの総まとめである「スーパーリフレクション」を行い、まさにこのサマースクールの集大成となる一日でした。最後のセミナーが終わると、当初「自分には難しすぎる」「英語で意見が言えない」と苦しんでいた高校生も、やり遂げた達成感と寂しさで泣き笑いながらHL、SLと抱き合っていました。スーパーリフレクションでは、この6日間の経験も踏まえて今までの自分の人生の軌跡を振り返り、将来へのロードマップを描きました。高校生たちは大きな画用紙に好きなように自分の人生をデザインして表現し、いままでと、このサマースクールと、これからのことに想いを馳せました。

9.1.7.　8月20日 (7日目)

サマースクール最終日は閉会式から始まりました。照明が落とされた会場にまず流れたのは、サマースクールの7日間をまとめた動画でした。つづいて、高校生・HL・SL、それぞれの代表が、思いの丈を伝えるスピーチを披露しました。その後、各ハウスごとに修了証書を高校生に授与しました。壇上で高校生と大学生が抱き合う姿は、かけがえのないハウスの結束を象徴していました。実行委員長の挨拶を最後に、閉会式は終了かと思いきや、ここで各ハウスから実行委員に感謝の意を伝える時間がとられました。最後の昼食をハウスごとに楽しんだ後は、何度も足繁く通った栗ガ丘小学校の校庭で、真夏の太陽と深緑の雁田山を背景に集合写真をとりました。別れを惜しみながら小布施を去っていく50人の高校生は、「旅人」として、ひとりひとり異なる目的地に踏み出していきました。

9.1.8.　全体タイムライン(右ページ参照)

9.2. リベラルアーツ・セミナー

9.2.1. リベラルアーツ・セミナーとは

本サマースクールの核となるプログラムのひとつがリベラル・アーツ・セミナーです。アメリカやイギリスの大学から集まった計16名の海外大学の大学生（セミナーリーダー）が、自身が大学において実際に学んでいるテーマについて少人数での授業（セミナー）を計画し、それを高校生に提供するというのが主な目的です。セミナーは基本的に英語で進められるため、バイリンガルの計16名の日本人学生がハウスリーダーとして各セミナーにつき、高校生の学びをサポートしました。このプログラムは、ハーバード大学のフレッシュマン・セミナーを参考に設計されており、文理等の枠組みを超えた学問のおもしろさ、奥深さが感じられる構成となっています。ひとつのセミナーは60分×4コマで構成されており、高校生はひとりあたり計3つのセミナーを受講することができました。各セミナーは、リーディング課題等の事前学習、セミナー中のディスカッションやプレゼンテーション、レポート提出等の事後課題といった一連の流れを体験してもらうことで、普段の高校での学びとはひと味ちがった、「大学での学び」を体験できる内容となりました。

9.1.8.　全体タイムライン

日程	2014/08/14(木)		2014/08/15(金)		2014/08/16(土)		2014/08/17(日)		2014/08/18(月)		2014/08/19(火)		2014/08/20(水)		日程
時間	企画	場所	企画	場所	企画	場所	企画	場所	企画	場所	企画	場所	企画	場所	時間
6:00～			起床		起床		起床		ホームステイ	ホームステイ先	起床		起床		6:00～
6:30～							農業体験	農家さん							6:30～
7:00～			朝食(7:00-8:00)	講堂	朝食	講堂					朝食	講堂	朝食	健康福祉センター	7:00～
7:30～	移動 池袋→小布施間を最大25名の高校生が移動 7時30分池袋発予定						朝食	講堂							7:30～
8:00～			セミナー(8:00-11:30)	各セミナー教室	セミナー	各セミナー部屋			セミナー	各セミナー部屋	セミナー	各セミナー部屋	荷造り・片付け		8:00～
8:30～							インタビュー講義	北斎ホール							8:30～
9:00～															9:00～
9:30～													閉会式	北斎ホール	9:30～
10:00～															10:00～
10:30～															10:30～
11:00～	12:00～12:30東京集合組小布施着 10:30　現地集合組小布施着						昼食	まちなか					休憩		11:00～
11:30～			昼食(11:30-12:20)	講堂	昼食	講堂									11:30～
12:00～	部屋確認・荷物整理							2限目	昼食	講堂	昼食	まちなか	Farewell Luch	講堂	12:00～
12:30～							インタビュー								12:30～
13:00～	開会式	北斎ホール	フォーラム ①講演(12:30-15:00) ②座談会(15:00-16:15)	北斎ホール	EGAKUワークショップ	講堂 (移動・会場設営バッファ30分込) 実質180分を想定		3限目	高校生主体企画	各セミナー部屋	リフレクション	講堂	解散・東京へのバス運行		13:00～
13:30～															13:30～
14:00～	アイスブレイク	北斎ホール						4限目							14:00～
14:30～															14:30～
15:00～							アウトプット	講堂							15:00～
15:30～															15:30～
16:00～									お風呂/ リフレクション	アケビの湯/穴観音					16:00～
16:30～			入浴(16:15-18:45)	アケビの湯/穴観音	入浴	アケビの湯/穴観音	自由時間	部屋、講堂			BBQ	小学校校庭			16:30～
17:00～															17:00～
17:30～	移動						お迎え	北斎ホール							17:30～
18:00～	ウェルカムディナー	講堂					夕食　ステイ先で	ホームステイ先	夕食	講堂					18:00～
18:30～			お祭り(18:45-20:00)	小学校校庭	夕食	講堂					Secret Event	Secret Event			18:30～
19:00～															19:00～
19:30～	入浴／リフレクション	アケビの湯/穴観音 健康福祉センター			ビブリオバトル	テラソ →(場転) →講堂	自由時間	ホームステイ先							19:30～
20:00～									タレントショー	北斎ホール					20:00～
20:30～			フリーインタラクション(20:30-22:30) ※ハウスリフレク込み	テラソ											20:30～
21:00～															21:00～
21:30～															21:30～
22:00～	片付け	健康福祉センター													22:00～
22:30～			移動時間		移動時間										22:30～
23:00～	就寝	健康福祉センター	就寝	健康福祉センター	就寝	健康福祉センター	就寝	ホームステイ先	就寝	健康福祉センター	就寝	健康福祉センター			23:00～

9.2.2.　セミナー紹介

1 . Innovations in Stem Cell Biology
ー 幹細胞技術における革新的技術

【概要】このセミナーでは、京都大学の山中教授が作成に成功したiPS 細胞をふくむ、再生医療にまつわる革新的な研究成果に焦点をあてます。幹細胞生物学の可能性と、実生活への応用の意義を学ぶことができます。

2. Information Technology and Public Policy
ー 情報技術および公共政策

【概要】情報技術が日進月歩する（ウェブメールや Facebook、LINE、YouTube 等）一方で、情報技術にまつわる法整備がその進歩に追いついていません。このセミナーでは、まず現在の情報技術とそれに関連する法制度・政策を学び、続いて何が現実的な問題として浮上しているのかを掴み、そして最後に情報技術と法制度の将来の展望を探ります。

3. Worldwide Trends in Video Games
ー ビデオゲームの世界的動向

【概要】熱心なゲーム愛好者以外にとってはあまり魅力的ではないかもしれない、このセミナーのタイトル。しかし、ゲーム産業は刺激的です。ゲーム産業の将来とはどのようなものでしょう。ゲームは将来、娯楽や藝術の主流としての地位を占めることになるのでしょうか。何が"良い"ゲームということを決めるのでしょう。そして、その基準は、日本だけでなく世界でも一緒でしょうか。

4. Haruki Murakami
ー 村上春樹

【概要】1981年のデビュー以来、村上春樹の優れた文学は日本を飛び越え、世界の多くの国の若者たちを魅了してきました。このセミナーは、2002年に出版された『海辺のカフカ』を題材とします。主人公はみんなと同年代の１５才。時間や多層構造をとる現実といったテーマに光をあてます。

5. Why does Religion exist?
ー なぜ宗教は存在するのか

【概要】有史以来、人間の社会に大きな影響を与え続けてきた宗教。例えあなたが信心深い人でなくても、私たちが与り知らぬところで宗教は我々の生活に影響を与え続けています。なぜ、宗教は存在するのか。そして、それはどのように誕生したのか。なぜ、宗教は未だに強い影響力を持ち続けているのか。このセミナーでは、こうした質問への答えを探し、また個人と宗教の関係を分析していく中で、我々の日常生活に宗教がどのような影響を与えているのか探っていきます。

6. How Different Are We, Really?: Cultural Lenses
ー 私たちは実際のところ、どれだけ違うのか：文化的バイアス

【概要】あなたは全体、それとも細部を気にする人、どちらですか。リラックスして、落ち着いて、そして心に平安がある方がいいのか、それとも情熱的で大いに喜び、そして興奮する方がいいのか。古くは西洋、東洋は全く別の世界と認識されてきましたが、現代社会は西洋、東洋その両者の考え方を理解することが必須とされる多文化な空間と化しました。こうし問いへの解を探すことから始め、このセミナーでは私たちの世界認識に文化がいかなる影響を与えているのかを議論したり、特定の文化にユニークな感情にまつわる映像を視聴したりと、さまざまなテーマを深めていきます。

7. Gender Bias in Science and Mathematics: Historically and at Present
ー 科学・数学界におけるジェンダー・バイアス　～過去と現在～

【概要】なぜ数学や科学を学ぶ女性は少ないのでしょうか。このセミナーでは、男性優位の数学・科学界において成功を収めた女性の人生に焦点をあて、その成功の理由と彼女たちが直面した困難を浮かび上がらせます。さらに、より視野を一般化し、日本と他国のジェンダー・バイアスを比較するなかで、数学・科学界におけるジェンダー・ギャップをつくっている要素を探り出します。

8. Advice for Young Leaders
ー 若いリーダーへの助言

【概要】世界には正解や間違いは存在せず、ただ異なる意見のみが存在するというポイントは、哲学において鍵を握るものです。著名な西洋哲学者の思考や視点の違いを学ぶことで、回答を導きだすことが困難な問題に対しても、自らの手で決断を下せるような方法を学び、最後には自らのリーダーシップの哲学を見つけることが、このセミナーの目標です。

9.An Introduction into Big Data and the Application in Advertising
ー ビッグデータ入門とその広告分野における応用

【概要】ビックデータ。最近流行のこの言葉をきいて、あなたは何を思いますか。このビックデータというコンセプト、私たちが思っている以上に、私たちの生活に身近な存在であることを知っていますか。私たちが生きる現代世界では、毎秒ごとに数十億以上の大小様々なデータが生み出されています。こうした無数のデータが私たちに とってどんな意味をもつのか、そして今日のビジネスにいかに応用することができるのかを学びます。セミナーを通して、ビックデータのビジネスにおける有用性や倫理問題、その将来に焦点をあてて議論をします。

10. Literature Humanities – Reading and Debating Western Classics
ー 人文文学 - 西洋古典の読解と討論への招待

【概要】コロンビア大学の有名なコアカリキュラムに基づいたこのセミナーでは、二つの西欧古典、『イリアス』と『饗宴』を関連づけて学びます。戦争や愛、宗教、信仰、家族といったテーマをこのセミナーでは深めていきます。

11. Nutrition and Wellness in a Globalized World
ー グローバル社会における栄養と健康

【概要】大手ファストフードチェーンやレトルト食品が溢れ返っている現代のグローバル社会。こうした現代社会において、正しい食を選んで健康を維持するために、栄養に関する基本的な知識と健康的な食べ方の基礎を学びます。セミナーを通して基本的な栄養の知識と現代の食習慣の現実、そしてこれらの問題を克服する解決策を学びます。

12.Why You Make Bad Decisions: The Psychology of Judgment
ー ～選択の心理学～ なぜあなたは謝った選択をするのか

【概要】温かいコーヒーの入ったカップを手に持っていると、あなたはおしゃべりな人に見られることがあります。「脂肪分１０％」と書かれた商品よりも「脂肪分９０％カット」と書かれた商品の方を好んで買う人もいます。宝くじを当てれば、永遠に幸福度が増大されると考える人もいます。なぜでしょう。このセミナーでは、実際に実験を行いその結果を分析することで、こうした社会心理学的な

1 . Innovations in Stem Cell Biology
ー 幹細胞技術における革新的技術

【概要】このセミナーでは、京都大学の山中教授が作成に成功したiPS 細胞をふくむ、再生医療にまつわる革新的な研究成果に焦点をあてます。幹細胞生物学の可能性と、実生活への応用の意義を学ぶことができます。

2. Information Technology and Public Policy
ー 情報技術および公共政策

【概要】情報技術が日進月歩する（ウェブメールや Facebook、LINE、YouTube 等）一方で、情報技術にまつわる法整備がその進歩に追いついていません。このセミナーでは、まず現在の情報技術とそれに関連する法制度・政策を学び、続いて何が現実的な問題として浮上しているのかを掴み、そして最後に情報技術と法制度の将来の展望を探ります。

3. Worldwide Trends in Video Games
ー ビデオゲームの世界的動向

【概要】熱心なゲーム愛好者以外にとってはあまり魅力的ではないかもしれない、このセミナーのタイトル。しかし、ゲーム産業は刺激的です。ゲーム産業の将来とはどのようなものでしょう。ゲームは将来、娯楽や藝術の主流としての地位を占めることになるのでしょうか。何が"良い"ゲームということを決めるのでしょう。そして、その基準は、日本だけでなく世界でも一緒でしょうか。

4. Haruki Murakami
ー 村上春樹

【概要】1981年のデビュー以来、村上春樹の優れた文学は日本を飛び越え、世界の多くの国の若者たちを魅了してきました。このセミナーは、2002年に出版された『海辺のカフカ』を題材とします。主人公はみんなと同年代の１５才。時間や多層構造をとる現実といったテーマに光をあてます。

5. Why does Religion exist?
ー なぜ宗教は存在するのか

【概要】有史以来、人間の社会に大きな影響を与え続けてきた宗教。例えあなたが信心深い人でなくても、私たちが与り知らぬところで宗教は我々の生活に影響を与え続けています。なぜ、宗教は存在するのか。そして、それはどのように誕生したのか。なぜ、宗教は未だに強い影響力を持ち続けているのか。このセミナーでは、こうした質問への答えを探し、また個人と宗教の関係を分析していく中で、我々の日常生活に宗教がどのような影響を与えているのか探っていきます。

6. How Different Are We, Really?: Cultural Lenses
ー 私たちは実際のところ、どれだけ違うのか：文化的バイアス

【概要】あなたは全体、それとも細部を気にする人、どちらですか。

9.3 フォーラム（小布施×Summer School by H-LABフォーラム）

9.3.1. フォーラム概要

日時:8月15日
会場:北斎ホール
概要:本年度のフォーラムでは、高校生がサマースクールの二日目に新しい世界と出会い、知の水平線を広げて欲しいという思いから、一つの分野に偏ることなく様々な分野で活動されている7名のゲストの方にお越し頂きました。第一部では各10分程の講演を行っていただき、ゲストの方々が今何をどのような思いを持ってされているのかを様々な実演を交えながら講演を行っていただきました。その後、ゲストの方々には2、3名のペアに、高校生にも小さなグループに分かれてもらい壇上からの話ではなくさらに近い距離で話ができるセッションを設けました。高校生からは様々な質問が飛び出し終始刺激的な時間となりました。

講演者情報一覧（50音順、敬称略）

9.3.2. 小川幸司氏
1966年生まれ。東京大学文学部西洋史学科卒業。長野県の県立高等学校の教員となり、豊科高等学校・松本深志高等学校・松川高等学校・飯田高等学校を経て、現在は長野県教育委員会事務局 教学指導課 指導主事。

9.3.3. 貝沼航氏
福島県福島市生まれ。現在、会津若松市在住、34歳。2005年に福島県初の社会的企業として株式会社明天を設立。設立以来、伝統工芸の産地活性化をミッションとして、産地インターンシップによる後継者育成事業、全国の若手デザイナーと職人の連携による新商品開発事業、飲食店を中心とした販路開拓事業などを行ってきた。現在、活動の集大成として漆器の魅力体感サービス「テマヒマうつわ旅」を展開中。

9.3.4. 詩歩氏
1990年生まれ。早稲田大学卒。インターネット広告代理店の新卒研修で作成したFacebookページ「死ぬまでに行きたい！世界の絶景」が62万いいね！を突破。2013年8月に同名書籍化し、オリコン2014年度写真集ランキング1位を獲得するなど話題に。2014年7月に2作目となる「日本編」を出版。シリーズ累計35万部を超えるベストセラーに。現在はフリーランスで「絶景案内人」として活動中。

9.3.5. 鈴木邦和氏
日本政治報道株式会社 代表取締役。1989年 神奈川県生まれ。東京大学工学部卒業。2011年 在学中に復興支援団体を設立、2000名以上のボランティアを東北地域に派遣し、社会貢献支援財団「東日本大震災における貢献者表彰」、平成24年度「東 京大学総長大賞」を団体として受賞。2012年 日本政治報道株式会社を設立、100万人以上の有権者が利用する国内有数の政治サイト「日本政治.com」を運営。趣味は将棋で、高校時代に県代表として全国大会に3度出場した。

9.3.6. 関和亮氏
長野県小布施町出身。映像ディレクター、フォトグラファー。1998年より株式会社トリプル・オーに所属。2004年にPerfumeのシングル「モノクロームエフェクト」のジャケットを制作したことを皮切りに、Perfumeのミュージックビデオ（MV）監督やアートディレクションを手がけるようになる。その後、数多くのアーティストのMV制作に携わり、2010年に公開されたサカナクション「アルクアラウンド」のMVは「第14回文化庁メディア芸術祭」のエンターテインメント部門優秀賞や「SPACE SHOWER Music Video Awards」のBEST VIDEO OF THE YEARを受賞。フォトグラファーとしても活動し、NHK連続テレビ小説「おひさま」「ごちそうさん」のタイトルバックなども手がけている。

9.3.7. 福井佑実子氏
大阪府出身。民間企業、大学勤務を経て2008年に株式会社プラスリジョンを立ち上げる。社名プラスリジョンには、常に「プラス」するのは「リジョン（融合）」の視点で、という活動方針を込めている。「融合」をキーワードに分野横断的ネットワークを活かしながら障害のある人の働く場づくりを事業的手法で確立することをめざす。農業分野との融合事例として、「オニオン・キャラメリゼ（玉葱飴色炒め）」のプロデュース実績がある。

9.4. ワークショップ

9.4.1. ワークショップとは
小布施という町の土地柄や地元の方との交流を最大限に生かし、「日本らしさ」そして「自分らしさ」に向かい合うことのできる機会を提供しました。

8.4.2. アイスブレイク・ワークショップ

アイスブレイクワークショップは、サマースクールに参加する、国内外の高校生、大学生の間の緊張をほぐし、交流を深めることを、主な目的として行われました。また、本ワークショップを通して、参加者に期間中のプログラムへの積極的な参加も促しました。本年度は「パズルゲーム」と「Cups」の2つを、アイスブレイクワークショップとして取り入れました。1つ目の「パズルゲーム」は、予め1人1枚ずつ渡されたパズルピースを揃えて、1枚の絵にするゲームです。パズルは、ハウスごとに1枚用意され、計8枚のパズルが完成しました。ゲームの途中、同じ絵の一部を持つ他の参加者を探すために、英語でコミュニケーションをとる場面があり、緊張した面持ちの高校生も多かったのですが、絵が完成した時には、たくさんの笑顔が見られました。2つ目の「Cups」は、プラスチックコップを使ったアクティビティで、ある一連の振り付けを高校生と大学生に覚えてもらい、それを曲に合わせて発表するというものです。高校生と大学生が互いに協力し、工夫し合って、それぞれのハウスが個性的なパフォーマンスをしてくれました。写真や映像を使用し2~3分程のムービーを作成・上映をしました。ムービー作成の技術講習を受けた後、ハウスごとに編集、最後に上映会を行う3部構成のワークショップでした。返る良い機会ともなりました。

9.4.3 EGAKUワークショップ

株式会社ホワイトシップ様のご協力のもと行われたEGAKUワークショップでは、「あなたの創りたい未来 ～ 大切にしていきたいこと」というテーマのもと、描くことを通した自己理解・他者理解を目指しました。「描く」ことに取り組む高校生・大学生ひとりひとりの表情は真剣そのもので、自らの将来について深い思考を巡らす時間となったようです。作品が完成後、ハウスごとにお互いの作品を鑑賞するワークを実施しました。バーバル・コミュニケーションだけでは知り得なかったお互いの新しい一面が作品を通して浮かび上がることに、参加者は新鮮さや驚きを覚えていました。「相手に意見を伝える時、大切なことは自分の想いを込めることだとわかった」「もう一度このワークを受けてみたい。同じテーマに関して自分がその時どう向き合のだろう」といった感想も寄せられ、参加者は落ち着いて自らの将来を考える時間を過ごせました。各人が持ち帰った作品は、サマースクール時に抱いた決意を想い起こさせるものとして、長く記憶に残ることでしょう。

9. 5 その他のイベント

9.5.1 開会式

７日間のプログラムにふさわしい参加者全員がワクワクするようなオープニングムービーで幕開けしました。実行委員長の佐々木、市村町長、セミナーリーダー代表、そして高校生代表からのサマースクールへの意気込み、そしてメッセージをいただきました。初めて顔を合わせて緊張している中、プログラム中の大学生メンバーの紹介、そして締めにジェット風船に思いを託したことでサマースクールへの熱意や、やる気が参加者の間で共有されたのではないかと思います。そんな期待を胸に参加者全員は開会式の会場を出ると共に、距離が近くなったように感じました。

9.5.2 リフレクション

毎日のイベントを通して高校生は何を感じ、考えるのでしょうか。リフレクションはハウスごとに高校生と大学生がその日のプログラム経て、または高校生が普段から何を感じ、考えているのかを共有し、意見を交換する時間です。また、セミナーや、ワークショップを経験するだけで留まらず、それによって何を得たのか自分の中で整理する習慣を付けて欲しい、そう考えています。大学生にとっても一度は経験した高校時代の悩み、葛藤。すぐには悩みは解決されなくても、共有することで、新しい考えや道は開けたりします。時には、泣き出す高校生も。このような毎日のリフレクションを通し、サマースクールで出会う仲間達は日々、一層深い絆を構築していきます。

9.5.3 お祭り

2日目には、小布施町町制60周年記念と併せて、日本文化を体感するお祭りを開催致しました。地元の有志の方々の御協力を得て、焼きそばやかき氷など数多くの屋台が出店し、昨年度に引き続き、愛知県三河市伝統の手筒花火も披露されました。また本年度は、長野県北部に位置する木島平村より鬼島太鼓の方々もお呼びし、迫力ある和太鼓のパフォーマンスが披露されました。町民の方々も数多く参加し、盆踊りやくじ引き大会を通してサマースクール参加者との交流も促進されました。多くの海外大学生にとって日本のお祭りに参加することは初めてのことであり、浴衣を着て夏の一期一会に感謝する日本文化を楽しんでいました。世代や国籍、文化の垣根を越えて交流が生まれたこのお祭りは我々を取り巻くボーダーが取り除かれた貴重なひと時だったのではないでしょうか。

9.5.4 フリーインタラクション

フリーインタラクションは、高校生、大学生、社会人の方々が、世代を超えて、その名の通り自由に、且つ近い距離で話し合うことができるセッションです。本企画には、同日に行われたフォーラムでのスピーカーの方々をはじめ、お祭りにて手筒花火を披露してくださった花火師の方々や、鬼島太鼓を演奏者の方々、計20名ほどのゲストの方々にご参加戴きました。フリーインタラクション中、フォーラムでの講演を聞いて、気になった点を質問する高校生や、手筒花火の仕組みやパフォーマンス方法について、花火師の方々のもとへ詳しく話を聞きにいく海外大学生などの、様々な姿が見られました。大学進学について相談する高校生もいて、各々収穫を得た１時間半となりました。

9.5.5 ビブリオバトル

3日目には各ハウス内における一体感の醸成と英語の運用力を向上させる狙いをもってビブリオバトルを開催致しました。ビブリオバトルとは各人がおすすめの本を持ち寄って互いに紹介しあい、最終的にベストスピーカー及びチャンピオンブックを選出する知的競技です。当日は前半と後半の二部構成で進められ、前半では各ハウス内で競い合った結果、ハウスを代表する発表者が選出され、ハウスメンバーと共により効果的なプレゼンテーションの仕方について議論を交わしました。そして後半では、各ハウスを代表するスピーカー8名の工夫を凝らした演出方法が光り、各ハウスが独自に考えた応援が会場を盛り上げました。人前にでて英語で話すことは非常に負担が大きかったとは思いますが、各人の成長に大きく寄与し、何よりもハウス内での絆がより一層強く確かなものになったことは非常に意義深かったのではないでしょうか。

9.5.6 インタビュー

4日目には「一歩踏み出す勇気を与え、自分らしい未来を描く」というテーマのもと、小布施町民の方にインタビューを行いました。インタビュー前には、「芸術新潮」元編集長で慶応義塾大学総合政策学部特別招聘教授である松家仁之氏にレクチャーをしていただき、インタビューの極意を教わったのち、実際に町なかに出ていきました。自分から質問を考えインタビューをしていく中で、その人の核心に触れていくことは、今までやったことのない経験だったかもしれませんが、じっくりと1人の人と向き合い、対話をする経験は非常に貴重なものになったようで、高校生からも「どの方もそれぞれのフィールドで楽しみながら充実感を持って仕事をしているということが良く伝わってきた。自分のやっていることについて話す姿がきらきらしていて素敵だった。」「それぞれの仕事にそれぞれの役割があって、みんなで社会を支えている、そんな感じがしました。」といった声が聞かれました。インタビュー後は、インタビューの中で最も印象に残っている言葉を選び、なぜ自分がその言葉に魅かれたのかを考えてもらうアウトプットを行いました。高校生はアウトプットを通じて自分と向き合うことができたようで、「本当に踏み込んだ話ができたと同時に、過去・今・未来の話を聴いて自分について考える機会になった」という声も聞かれました。

9.5.7 ホームステイ

サマースクール参加者と小布施町民の方々との交流を促進、また小布施の文化を肌身を持って体感していただくことを目的とし、4日目の夜に高校生・ハウスリーダー・セミナーリーダーが町民の方々のお宅やお寺に宿泊させていただく民泊の機会を設けました。高校生からは「すごく暖かく迎え入れてくれてとても楽しい時間を過ごす事ができたし、小布施に住んでいる方の話を聞けていい経験になりました」という声や、お寺で宿泊をしたセミナーリーダーからは「普段泊まることの出来ないお寺に泊まれて良い経験になりました」と言う声が聞かれるなど、とても好評的なプログラムでした。また、サマースクールが終わった後もホストファミリーの方と連絡を取り合っている姿が見受けられました。小布施の「おもてなし」の心を文字通り体感するとともに、第二の故郷として小布施に帰ることの出来る場所を各々が見つけることのできた非常に貴重な経験でした。

9.5.8 大学生向けセミナー

5日目を迎え、高校生は海外大生からのセミナーにも慣れてきました。『そんな「サマースクールの当たり前」となりつつあった「大学生から高校生へ」という形を壊すようなチャレンジングな企画を』、という思いから大学生セミナーを行いました。各自の興味のあること、他人に教えたいこと、熱く語りたいことをテーマに「高校生から大学生に」対してセミナーを開講しました。10グループに分かれた高校生は本期間前から話し合いや準備を進めていました。普段は何かを教えるという機会の少ない高校生にとってかなり難易度の高いプログラムでありましたが、どのグループも予想を上回るハイレベルなセミナーを展開していました。受講した大学生からも大きな刺激になったとの声が聞かれました。また、グループで協力して難しい課題を乗り越えたことで高校生同士のチームワークはさらに強いものになりました。

9.5.9 タレントショー

高校生・大学生問わず、得意なことや趣味など自らの特技（Talent）を披露する場として5日目の夜に北斎ホールにて行ないました。今年はホームステイに協力していただいたご家族にも観覧していただき、アーチェリーやダンス、歌、ピアノなど多岐にわたる特技が披露されました。今年は日々を共に過ごしていたハウスごとの出演が多く見受けられた他、「ふるさと」を歌う演目の際に自然に会場が一体となって歌うようになった光景が最も印象的でした。「まさか自分が出るとは思わなかった」「当初は全く興味のないイベントだった」という高校生からも「サマースクールの思い出になった」「普段は見えない一面を垣間みることができたてよかった」といった感想が寄せられ、親睦をより深める契機となった企画となりました。

9.5.10 ホームカミング・ディナー

開催二年目を迎えた本サマースクールが昨年度参加者を招き、催されたのがホームカミング・ディナーです。昨年度参加者の40名のうち半数以上が参加したディナーでは、昨年度の参加者同士が旧交を温めるとともに、今年度の参加者とも交流が実現しました。司会進行を務めてくれた3名の昨年度参加者をはじめとする、大きく成長したアラムナイの姿は非常に凛々しく、今年度の参加者にとっても刺激となったようです。少しずつ、それでも確実に、小布施サマースクールの輪が広まっていっていることを感じさせるひとときでした。

9.5.11 スーパーリフレクション

毎日のリフレクションのまとめに付け加え、生まれた時から今まで、そして将来へのイメージを整理する時間がスーパーリフレクションです。はじめに、毎日のリフレクションのように、大学生と高校生が高校生の過去と未来について話し合います。自分がどのようなことを無意識的に好きになってきたのか、自分がどんな選択をしてきたのか、自分が何をしたいのかなど普段はあたりまえ過ぎて考え漏らすようなことに対して意識的になってもらい、他の人とは異なる"自分"についての分析をしてもらいます。そして、1 枚のA3用紙に絵と言葉、または雑誌の切れ端やすきな素材をつかって自分自身について、自らのやり方で表現してもらいました。

9.5.12 閉会式

「ありがとうございました!」涙で顔をくしゃくしゃにしながらも、高校生たちの最後の挨拶は、どこか清々しく聞こえました。閉会式では最初に小布施町副町長の久保田隆生様からご挨拶をいただき、その後SL, HL, 高校生代表、そして実行委員長からの挨拶がありました。各々が自分の思いの丈を熱く語り、長かった７日間も終わりに近づきます。最後にハウスごとに壇上に上がり、一人一人名前を読み上げて修了書授与式を執り行いました。自分のハウスのHLから一言と共に修了書を渡され、互いに抱き合い、感謝の言葉を述べる高校生の姿は、このたった七日感のサマースクールが高校生にとってとてつもなく大きな、かけがえのない時間であったことを示していました。

9.6. 参加者について

9.6.1. 参加者内訳

＜性別＞
男子 18名
女子 32名

＜高校区分＞
国立 0名
公立 31名
私立 18名
海外高校 1名

＜学年＞
1年 19名
2年 18名
3年 13名

＜居住地＞
福島県 3名
長野県 25名
群馬県 2名
栃木県 1名
東京都 5名
神奈川県 3名
千葉県 1名
岐阜県 1名
愛知県 2名
兵庫県 1名
広島県 1名
大分県 1名
沖縄県 2名
米国 2名

9.6.2 参加者の声

最初は自分の英語のコミュニケーション能力や将来なりたいものがない自分に落ち込み、自分は今まで何をやってきたのだと思いましたが、自分が今まで経験してきたものは決して無駄ではないと思いました。様々なバックグラウンドを持つ方がいて本心で話をしているうちにとても刺激を受けました。日常の生活で高校生は毎日に追われ、自分で思うことはあっても人に本気で話すという時間は少ないと思います。大学生の方と話せるということ自体も自分で探さなければ、ほとんど経験出来ないことだと思います。このサマースクールの一番得ることができると思うのは、様々な方と繋がっていけるということだと思います。そのおかげで多方面から物事を見るという事が以前よりできるようになったと思います。まず、座談会にいく以前は自分は何も出来ることがないと決めつけ、無意識のうちに最大限努力をするという事という当たり前のことを忘れてしまっていたと思います。その事に関しても、自分を見つめ直せた期間だったと思います。明確に自分の将来が見えたというよりも、こんな選択肢もあるのかと気づかされた場でもありました。このサマースクールに参加できたことは、私の一生の財産です。ですが、このサマースクールが私の人生のターニングポイントだと言うためには、今後の自分の行動だと思っています。
本当に参加できて、皆さんに会えて良かったです。ありがとうございました。

セミナーで自分の意見を常に求められたことが活きたり、自分の言いたい事をまとめる能力がつき、学校でサマースクールについて感想発表する際に先生方から褒めてもらえました。フォーラムの講演者の方がおっしゃっていた「人生を賭けてやりたいこと」を本気で模索し、向き合ってる大学生の皆さんは多くの高校生の勇気になったと思います。少ししか年が変わらない大学生のみなさんが目的を持って行動しているのを見て、高校生の私にも何か出来る事があるんじゃないかと思えました。
7日間本当にありがとうございました!!大袈裟でなく、私の人生で大きなキッカケとなる体験だったと思います!!

9.6.3. ハウスリーダーの声

サマースクールの中にある数々の役割の内、最も高校生と距離が近いと言われるのがこの「ハウスリーダー」という役割です。通称：HLと訳されて使われているのですが、このHLたちは一つ一つあるハウスをまとめるとっても重要な役割を背負っています。HL募集当初からHLの役割は「セミナーリーダーと一緒にセミナーを準備すること」、「高校生のロールモデルになること」、そして「参加者全員の架け橋となること」の大きく三つに分けれていました。一番身近な大学生だからこそ、高校生のロールモデルにならなければいけない。バイリンガルであり、HL自身が多様なバックグラウンドを持っているからこそ、世代や国籍の違う参加者の架け橋とならなければいけない。そして高校生の立場になって、高校生のために一番ためになるセミナーをセミナーリーダーと作らなければならない。なかなか大変な役割ではありますが、一番関わりがあるからこそ高校生の変化や成長に気づくのだと思います。)

セミナー初日になかなか話してくれなかった高校生が最終日にはもっと積極的に話してくれたり、分からない部分は積極的に聞いてくれたり、この７日間の間でたくさんの高校生に小さな変化が訪れたのではないかと思います。初日あんまり友達ができていなくて、セミナー中もとっても静かだった高校生がタレントショーのときに活躍しているのを見たときは、本当に涙が出そうになって、サマースクールが高校生に与える機会やチャンスがとても大きいものなんだなと思いました。サマースクール後も高校生たちのために何かできればなと考えています。

9.6.4. セミナーリーダーの声

Being part of the Obuse x HLAB Summer School program was a life changing experience. I feel that all of us seminar leaders learned just as much from the high school students as they did from us, as they shared with us their ways of thinking, lifestyles, and hopes for the future. Even as a university student studying in London, the program was an amazing opportunity for me to meet amazing new people, experience new things, and gain new skills. I really cherish the fact that I was able to bond with the high school students over the course of the program and act as a positive influence in their lives.I have to commend all the members of the Executive Committee for their tireless efforts in ensuring the best possible summer school experience for all the high school and university students - they are a very big reason that everyone involved in the program had the opportunity to be part of such a great experience in the first place, and I also have to give my sincere thanks to the townspeople of Obuse for being so welcoming and showing us outsiders such warm hospitality throughout the course of the program.There was a wide range of activities, sights and things to be learned. From exploring the lovely, incredibly hospitable town of Obuse and viewing the gorgeous Japanese countryside, to the Egaku workshop and the seminar courses - the program guarantees new and enjoyable experiences for everyone involved These experiences will stay strong in the memory of all the people who were fortunate enough to be part of the program,
and I can honestly say that my life is certainly richer for having been so.

9.6.5. 実行委員の声

高校3年生の夏、私も進路や人生に悩む高校生の1人としてHLAB2012に参加しました。自分よりも年下の高校生、そして何歳も違わない大学生の存在に衝撃を受けたあの日が今でも鮮明に思い出されます。今度は衝撃や感動を与える立場としてサマースクールに関わりたい、二度目の夏はそうして始まりました。

小布施町の方々や50人にも及ぶ大学生とプログラムを作り上げ、高校生と向き合った経験は私をもあたりまえの世界から連れ出し、自分を見つめ直す機会になりました。高校生の顔が見えない時期から高校生に経験してもらいたいことや快適に生活を送ってもらうために必要なことを考え、それを現実のものにする過程には、苦悩も多くありました。しかし、ハウスの仲間との別れに涙する高校生、感謝の言葉を述べてくれる高校生を目にした瞬間、HLABに関わることができた喜びを感じました。もし、高校生が今まで知らなかったことをひとつでも知り、あたりまえだった日常から一歩踏み出すきっかけや目的を掴めたと少しでも感じてくれたなら、これ以上嬉しいことはありません。

HLABの魅力のひとつに、人と人とのつながりが挙げられると思います。数年前高校生だった参加者がハウスリーダーや実行委員として戻ってきたり、参加者同士で新しいプロジェクトに取り組んでみたり、参加年度を越えた交流も存在します。私もその魅力に取りつかれた1人です。未来の参加者そして過去の参加者と小布施の思い出話に花を咲かせる日が今から楽しみです。

9.7 終わりに

ここで少しだけ、私自身の記憶に最も鮮烈に残っているエピソードを紹介します。最終日、栗が丘小学校のグラウンドで撮影した集合写真。真夏の太陽に照らされ、まぶしいほどに輝いていた白いTシャツ。美しいコントラストをなす、深緑の雁田山とスカイブルーの夏空。炎天下のなか、何度も通った栗ガ丘小学校のグラウンド。サマースクールを象徴する情景が、そこにはありました。

今、私はこう思います。あのときグラウンドで輝いていたのは真っ白なTシャツだけではないと。同じくらいに輝いていたのは、参加高校生50人の目前に広がった果てしない未来であると。あの瞬間、旅がはじまりました。

最後になってしまいましたが、無理なお願いにも関わらず、有形無形の協力を快く引き受けてくださった小布施町民の皆さまをはじめ、サマースクールに協力してくださった全ての皆さまに感謝申し上げ、挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

小布施 × Summer School by HLAB
実行委員長 佐々木弘一

10. 徳島

10.0. チーフ・コーディネーター 挨拶

◆はじめに
「徳島県でぜひHLABサマースクールを」
徳島県教育委員会からお声かけ頂き、早1年。4年前に東京で産声をあげ、昨年には長野県小布施町でも同時開催されたHLABが、本年は「徳島×Summer School by HLAB」として、徳島県海部郡牟岐町で開催されました。徳島県内から30名、県外から9名、合計39名の高校生参加者が、世界中から集まった大学生運営メンバー約40名と、6泊7日間のプログラムを共に体験しました。
徳島県牟岐町という初めての開催地で、徳島県教育委員会の方々、そして牟岐町の商工会や婦人団体、地元の方々のご尽力のお陰で、徳島×Summer School by HLABを開催することができました。運営委員会を代表し、心から感謝申し上げます。

期間中に変化する高校生の様子・表情を見て、参加後の感想を聞き、改めてHLABのインパクトの大きさと地方開催における意義を実感しております。高校生にとって、このサマースクールは、これまでにない多様な価値観や新しい世界に触れて感銘を受け、開催地牟岐町の方々との触れ合いを通じて、“地元の人々の温かさ”を体感する、またとない機会となりました。

◆実施の経緯と趣旨
HLABが、本年なぜ徳島県で初開催を迎えたのか。そこには2011年からの東京開催、小布施開催からつながる御縁があります。はじめに、「なぜHLABを徳島県で開催したのか？」ということを簡単に説明させていただきます。

◆HLABの日本における広がり
東京で2011年から開催されているHLAB。その教育的効果については、全国的にメディアで取り上げて頂き、官・民問わず文部科学省をはじめとした教育界の様々な方々に関心をお寄せ頂いております。中でも、徳島県教育委員会の方々におかれましては、幅広い学問と多様な人との出会いを通じて、「高校生に将来の選択肢を広げ、主体的に人生を選択してほしい」というHLABの理念に大変共感頂き、本開催のお声がけを頂きました次第です。

◆地方開催における可能性とは：小布施×Summer School by HLAB
また、2013年の長野県小布施町HLAB開催を通じ、「HLABを町全体に受け入れて」頂き、協働でプログラムを創り上げることが、プログラムの成功には不可欠であると実感致しました。またHLABは、海外大学生が「日本の地方を訪れる」という国際交流プログラムの側面も持ち合わせているため、「日本の地方活性化」の文脈の中でも大きな可能性を秘めています。そうした可能性に期待してくださった徳島県教育委員会の方々から、このたびの貴重な機会を頂戴し、1年前から本サマースクールの構想を進めてまいりました。
こうして、本年初めて実施された徳島×Summer School by HLAB。本報告書をご覧いただくことで、徳島×Summer School by HLABの目的や内容、そして、その魅力と様々な成果を存分に感じていただければ幸いです。

徳島×Summer School by HLAB
チーフ・コーディネーター　水上友理恵

10.1. タイムラインと振り返り

10.1.1. 8月16日(1日目)

牟岐町海の総合文化センターに集合し、ホールにて開会式を行いました。英語を中心に進められる式に、高校生は不安と期待の入り混じった表情を見せていました。初日では、こうした場の緊張を解くことを意識したプログラムを設計しています。例えば、その後すぐに行ったアイスブレイクセッションでは、身体的にも心理的にも距離を縮めるべく、身体を動かす企画を通して、参加者間のコミュニケーションを促しました。そして、次第に一同に笑顔が見られ始められるようになった後には、和室で近い距離で車座になり、（株）チームラボ代表の猪子寿之氏をスピーカーに迎え、フォーラムを行いました。参加者たちは、徳島県から世界に羽ばたいた先輩である猪子氏の仕事・ライフストーリーなど盛りだくさんの話に熱心に耳を傾け、講演後の質疑応答では「クリエイティブな仕事をするためには？」等、近い距離に迫って積極的に対話を試みる様子が印象的でした。

HLABでは、1日の終わりに「リフレクション」という振り返りの時間を毎日設けております。ハウス毎にその日の省察を行う中、参加者たちは馴れない中でも英語を使い、初日の学びや刺激を賢明に自分の言葉で伝えようとしていました。

10.1.2 8月17日(2日目)

2日目からセミナーが始まります。HLABのメインコンテンツとなるセミナーを終えた参加者は、昼食でリフレッシュをしました。本サマースクールの食事は、徳島ならではの郷土料理を取り入れた栄養満天の献立、当日の調理、心一杯のおもてなしを通じ、地元の婦人会・商工会の方々に全面的なご支援を頂きました。また、身近に地元の方々と触れあう機会となり、参加者にとっては食事の時間が心やすらぐひとときとなりました。

午後は、山崎繭加氏、竹川隆司氏、大宮透氏をスピーカーに迎え、フォーラムを行いました。各分野で日本を代表するゲストスピーカーの方々のライフストーリーに親近感を覚えた参加者も多く、食い入るように夢中になって耳を傾ける様子が印象的でした。フォーラム後は牟岐少年自然の家にて、「フリータイム」という高校生自身が主体となり計画し、実行するという時間枠を設け、思い思いに仲間や大学生を誘い合って１時間を過ごしました。夕方からは、フォーラムのスピーカーや徳島出身の様々な分野で活躍されている社会人の方々と交流する「フリーインタラクション」の企画が行われました。年代関係なく全員が畳の上で車座になり、思い思いの輪となり、フォーラムに関する質問から、進路相談などの将来の話から学校生活・人間関係などの身近な話まで、近い距離で様々な対話がなされました。サマースクール開始2日目にして、高校生はこれまでにない価値観に触れ合う機会となりました。

10.1.3. 8月18日(3日目)

各セミナーが第2講となった3日目には、徐々に緊張が解れてきた高校生が積極的に発言を始めるなど盛り上がりをみせました。午後には2つのフォーラムが行われ、1つ目のフォーラムでは、徳島を活動拠点とし、神山町などを中心に活躍されている建築家の坂東幸輔氏と美波町で株式会社あわえを展開中の代表の吉田基晴氏のお二方に、なぜ今地方復興なのか、そしてなぜ徳島なのかといった事を中心にお話を伺い、改めて「徳島の魅力」を気が付かされました。

2つ目のフォーラムでは、飯泉嘉門徳島県知事がゲストとしていらっしゃり、高校生も壇上で質問する機会を得るなど、普段はあまり触れることのない「知事」という仕事について興味深く知ることができました。

夜にはタレントショーが行われ、セミナーやフォーラムとは一味違ったリラックスした雰囲気の中で笑いや感動を交えた交流を深めることができました。

10.1.4. 8月19日(4日目)

サマースクールの折り返し地点にあたるこの日は一息つくための"リラックス"がテーマです。午前中は、宿泊施設から臨んだ海でのシュノーケリングを行いました。これまでは午前中がセミナー漬けだったため、特に徳島県外からの参加者は新鮮な気分で牟岐の海を満喫した様子で、大学生も混ざって無邪気にはしゃぎながら、ハウス・セミナー外との交流を楽しんだ様子でした。さらには、その後のダイアログセッションやカツオのたたきワークショップでも、これまで話すことがなかった大学生や高校生と自身の興味分野で対話する絶好の機会となり、リラックスしたムードの中でも刺激ある1日となりました。

10.1.5. 8月20日(5日目)

5日目は午前のセミナーの後、午後から牟岐あんどんの会"娃佳哩（あかり）"のご協力の下で行灯制作のワークショップを行いました。行灯の組み立てからデザインまですべて参加者が行い、それぞれが思い思いの行灯をデザインしていました。制作した行灯はこの日の夕食後、少年自然の家近くの海岸で行われた展示会で地元の作品とともに一般に展示され、夕陽が沈んだ後には、行灯が照らすその浜辺でリフレクションを行いました。ついつい、思いを話したくなるのは、幻想的に行灯が光り、波の音が聞こえる場所柄でしょうか。星を眺め、サマースクールと自身の変化を心ゆくまで振り返る、最後のリフレクションとなりました。

10.1.6. 8月21日(6日目)

6日目も午前中はセミナーから始まり、午後は「大漁旗ワークショップ」と題し、地元の漁師の方々の指導のもと、ハウス毎に大漁旗を制作しました。「1週間を共にした"私たちのハウスらしさ"とはなんだろう？」というテーマを元に、ハウス独自のキャラクターやカラー、言葉など思い思いの表現方法を考案し、最終的に色とりどりの大漁旗が生まれました。このように、最終日を目前に控え、サマースクールのラップアップとなる企画をテーマに設計されたのが、6日目です。

翌日にはフィナーレを控えた最後の夜には、野外の満天の星空の下でキャンプファイヤーを行い、レクリエーションを楽しんだ後、火を囲んで輪になり「このサマースクールで得たこと」「今後のこと」「心境の変化」等、思いの丈を存分に語り合いました。過ぎゆく時間を惜しみながらも、充実した時間に思いを馳せる、参加者の生き生きとした表情が、煌めく火の粉に照らされ、夜の闇に映えていました。

10.1.7. 8月22日目(最終日)

サマースクール最終日。一時さえ惜しむ高校生は朝早く起きて海岸に向かい、大学生も交えてサマースクールの思い出を語り合う姿が見受けられました。そして最後のイベントである閉会式へ向かいます。本期間中の様子をプレイバックする動画でこの6泊7日を各々で振り返った後、高校生2名とSLの代表者が壇上でスピーチを披露しました。溢れる涙を抑えきれない参加者も多々見受けられ、式の後には牟岐町商工会のご協力のもと開かれた、牟岐お別れパーティーでは、最後のひと時をすごしました。帰り際の高校生の顔は涙に濡れながらも達成感と自信に満ちていました。こうして6泊7日の「徳島×Summer School by HLAB」は、幕を閉じました。

10.2. リベラルアーツ・セミナー

10.2.1. リベラルアーツ・セミナーとは

本サマースクールの核となるプログラムのひとつがリベラルアーツ・セミナーです。各セミナーは3コマで完結するよう設計されており、6泊7日を通じて「参加者自身が希望した」2セミナーと「参加者の新たな学問との出会いの可能性を広げるために無作為に割り当てられた」1セミナーの計3セミナーを受講します。

10.2.2.セミナー紹介

1. モダンダンス入門（Introduction to Modern Dance）
   -Ferena Kagata and Ako Mizuno
2. 身近な化学：石鹸（Household Chemistry：Soap）
   -Hikari Murayama and Shugo Ohashi
3. くすりの力：医薬品基礎（Power of Medicine:A Basic Look at Pharmaceutical Drugs）
   -Emily Chang and Nobuhiro Morita
4. だまされる心：思考の弱点を知ろう（Fooled by Our Minds：Discovering the flaws in our thinking）
   -Shuta Takada and Kan Shingo Umehara
5. 政治における中立とは：人道主義における日本の役割（Politics of the Apolitical: What is Japan's Role in Humanitarianism?）
   -Bran Shim and Moe Suzuki
6. 世界の言語を読み解こう：言語学入門（Decoding the World's Languages：An Introduction to Linguistics）
   -Tiphanie Fuentes and Kazuki Misonou
7. 世界における米国の影響：特長と問題点（The United States of America：The Good, The Bad and The Ugly）
   -Melinda Wang and Miki Tsuruhara
8. 西洋と東洋の出会い：西洋美術における日本の影響概説（West Meets East：A Survey on Japanese Influence in Western Art）
   -Gianina Yumul and Chika Miyashita
9. 「家」とは何か（HOUSE?）
   -Akihiro Moriya and Li Yoshimi
10. 交通事故、戦争、災害復興：社会学者はどのように世界をみているか？（Traffic Accident, War, and Disaster Relief.How Social "Scientists" View the World）
   -Ryosuke Kobayashi and Yuta Hayashi

■セミナー紹介

5.政治における中立とは：人道主義における日本の役割/Politics of the Apolitical: What is Japan's Role in Humanitarianism?

人を「助ける」。一般的に善と考えられ、一見政治とはかけ離れた印象を与える人道主義。しかし、歴史的に見ると人道主義は植民地時代に生まれた概念であり、進んでいる「私たち」が遅れている「彼ら」を助けるという考えが未だに続いているという主張もある。このセミナーでは、理論、NGOのケーススタディー、そして私たち個人の体験談を通じて、人道主義の政治性について考えました。

7. 世界における米国の影響：特長と問題点/The United States of America -The Good, the Bad and the Ugly

多くの人が考える理想郷としてのアメリカと現実との間には大きな乖離があるのではないかというのがこのセミナーの根源にあるものです。エドワード・スノーデンやイラク戦争などのケーススタディーから民主主義・自由主義・資本主義・個人の人権と国家の安全保障のありかたなど様々な価値観や思想について紹介し、ディベートやディスカッションを通じて考えを深めることを目的としました。

10.3.フォーラム

10.3.1.フォーラムとは

各日午後の時間帯には、政治、経営、物理、芸術等様々な分野で社会のトップリーダーとして活躍されている有識者の方々をお招きしたフォーラムがあります。御自身のライフストーリーを含む「今、高校生に伝えたいこと」をテーマに、講演と質疑応答を行いました。講演で語られる彼らの経験や、熱いメッセージを通して、参加者にとって新しい価値観との出会いや将来を考察する契機となることを目的としました。また、各フォーラムでは、講演者に日本語、または英語でご講演頂いた後、高校生・大学生と講演者の対話を意識した長めの質疑応答や、また講演者と同じ目線で交流・議論できるような機会を作ることで、高校生・大学生・ハーバード生といった3つのアクターが能動的に参加し、対話を行うことが可能となる学びの場を創造することを目指しました。

10.3.2.猪子寿之氏

初日のフォーラムでは徳島県ご出身のクリエイターである、（株）チームラボ代表・猪子寿之氏をスピーカーにお迎えしました。まず講演の前半部では、映像を用い、現在までのチームラボの代表的作品を解説していただき、参加者はテクノロジー技術を駆使した先進的なアート作品に圧倒され、思わず息を呑んでいる様子でした。後半部では、現在の仕事に至るまでのライフストーリーを高校生の目線に寄り添って、お話しいただきました。ご自身の生い立ちから始まり、進路や生き方に迷った際には「（たとえ家出をしてでも）自分が直感的に"良い"と思えること」「世間体に関わらず、未来に繋がる仕事」をしてきた等、猪子氏らしい独創的なメッセージを投げかけてくださいました。特に、「自分が18歳だった時、世界中のどの大人が20年後の自分の（今の）仕事を想像できただろうか」という言葉に感化され、フォーラム後には、潑溂とした表情で「常識に囚われず、自分らしい生き方がしたいです！」と感想を述べる参加者も見受けられました。

10.3.3.山崎繭加氏・竹川隆司氏・大宮透氏

2日目に行われたフォーラムでは、大宮透氏、竹川隆司氏、山崎繭加氏の三名をスピーカーとしてお迎えしました。まず、3名にそれぞれ、自身の人生におけるこれまで歩みや、ターニングポイントになったことをお話しいただきました。その後、3名を迎えてパネルディスカッションをおこないました。話題は、それぞれの高校生時代の思い出や、自身の初めての海外体験、どうやって仕事を見つけていったのか、など多岐にわたりました。また、高校生が互いに疑問に思ったことや質問したいことを話し合う時間が設けられ、スピーカーと活発なやり取りが展開されました。

10.3.4.坂東幸輔氏・吉田基晴氏

ハーバード・デザイン・スクール卒で建築家の坂東幸輔氏、そして東京と徳島に拠点を持つIT企業、サイファーテックの社長を務める吉田基晴氏を迎えてのフォーラム。一見交わらない両者の共通点は、（1）徳島出身であること、そして、（2）自らの専門性を活かしながら東京と徳島、都会と地方の双方で活躍の場を広げていることです。「サテライトに生きるということ」と題されたこのフォーラムでは、「徳島に残るか、東京に出るか」ではなく「徳島でも、東京でも」と拠点や活動を複数持ちながらご活躍の幅を広げる徳島出身の二人の先輩の経験を聞き、後輩の高校生が視野を広げました。

10.3.5.飯泉嘉門氏

徳島県知事である飯泉嘉門氏を迎え、HLAB2011の参加者である南藤優明（東京大学・1年）をファシリテーターとし、高校・大学時代から自治省を経て知事に至る人生と、そこから得た教訓、また徳島に対する思いをお話しいただきました。前述の坂東幸輔、吉田基晴氏との知事も交えた「地方の人材と活性化」をテーマとした対談や、知事と高校生の活発な議論も行われました。

10.4. ワークショップ

10.4.1.ワークショップとは

本サマースクールでは、ワークショップと称して、経験型の学びの場がつくれられました。ワークショップの目的は、仲間との交流や、自己表現など多岐にわたり、なかには地元の方の協力を仰ぎながら文化体験を行うワークショップもおこなれました。

10.4.2 アイスブレイク

開会式の後、高校生全員と大学生でアイスブレイクワークショップを行いました。本企画の目的は、サマースクール初日で緊張し、凝り固まった体と心をほぐしながら、自己表現を試みること、そして体験的な活動をしながら生まれる会話を楽しみ、ほかの人の作品を見ることで違いに気づいたり、考えを深めたりすることでした。

企画は以下の3部構成で行いました。2ハウス毎に名前のアルファベット順などテーマにあわせて列を作る「整列ゲーム」。ハウス関係なく自分の持っているカードと同じものを持っている人をジェスチャーだけを使って探す「仲間探しゲーム」。参加者が短い英語を発することで英語への抵抗感をなくし、体を動かすことで心もほぐすことを意図しました。ダイヤブロックを使ってハウス対抗で一番高いタワーを時間内で作る、「ブロックタワー作り」。ハウスで団結して作るということでよい雰囲気作りにつながりました。また付随して、ダイヤブロックで自分の好きなものをひとつ作ってそれを使いながら自己紹介をするアクティビティも行いました。お互いのことをより知ってサマースクールに臨めるような企画となりました。

10.4.3. ダイアログセッション

4日目の中日にに「ダイアログセッション」と題した、高校生と大学生の交流の場を設けました。本企画の目的は、設定されたテーマに対し、独自の意見を持つ大切さや、お互いの考えを認め合うことにあります。また、実際に自分の体験したこと、興味を持ったことを共有し、楽しむ狙いもあります。期間中にセミナーを持たない大学生がミニセミナーを開き高校生と交流したほか、高校生による英語での阿波踊り講座など高校生が主体的に動く機会も設けました。この企画は、後のフリーインタラクション等での会話の糸口となり、高校生と大学生が交流をより促すものとなりました。

10.4.4　カツオのたたき・心太ワークショップ

牟岐町の海の恵みを生かし、牟岐町沖で獲れたカツオ、そして牟岐町の特産品である天草を使った、カツオのたたき・心太づくりを行いました。本企画は、牟岐の食材を用いて現地の方と一緒に調理することにより、牟岐の魅力を実体験しつつ現地の方と交流することを目的としました。地元婦人会などの調理指導協力のもと、地域の方、仲間との交流が盛んに行われ、人と触れあう温かさを肌で感じるひとときとなりました。また皆で調理した料理はとても美味しく、笑顔溢れるワークショップとなりました。

10.4.5.行灯ワークショップ

牟岐町の伝統である行灯を「牟岐あんどんの会・娃佳哩」の皆さんの指導のもと、行灯の枠組みから展示までを行いました。行灯の和紙には自分の将来について自由にデザインし、夜には浜に300個の行灯を並べリフレクションを行いました。このワークショップを通じ、参加者が牟岐の伝統と自分の将来について考えるきっかけとなりました。

10.4.6 大漁旗ワークショップ

6日目にハウスの旗の制作を行うワークショップを行いました。本企画の目的は漁業の町独特の風景である大漁旗を漁師の方々と交流したり、その意味や思いを学んだりしながら作ること、また、１つの目標に向かってチームで協力しつつ、自分たちを表す旗をつくることでした。牟岐町商工会の全面的な協力により、色とりどりの絵の具を使ってそれぞれのチームが思い思いに、体全体を使いながら自分たちとサマースクールでの思い出を表す旗を作ることができました。また、牟岐町で漁師をされている方々をお呼びし、漁の様子を聞いたり、実際に使っている道具を見せていただいたりする機会を設けました。作製した旗は、来年の3月に行われる出羽島・牟岐アート展にも展示される予定で、サマースクール後も地域と参加者との繋がりを担う企画となりました。

10.5.フリーインタラクション

徳島のフリーインタラクションでは、県内の上勝町や神山町といった全国でも有数の先進的な取り組みを行っている地域で御活躍中の方を中心に、徳島にゆかりのある方にゲストとしてお越しいただきました。徳島で生まれ育ち、県内・日本全国・世界各地で御活躍されているゲストの方々のお話は、県内の高校に通う生徒にとっては特に身近に感じられたようで、「自分自身も将来は何らかの形で徳島に還元できれば」と話す高校生もおりました。高校生の中では漠然としたイメージでしかなかった「大学生」や「社会人」というものが、この企画を通して、自分の将来に引きつけて考えられるようになった様子でした。

10.6.その他のイベント

10.6.1. 開会式

開会式はオープニングムービーの上映から始まりました。まず徳島英語村プロジェクト実行委員長の佐野義行様、牟岐町長の福井雅彦様からのご挨拶を頂きました。続けて運営委員長の水上友理恵からご挨拶をさせていただくと共に本プロジェクト実現にあたって多大なご尽力を頂いている地元の皆様をご紹介し、高校生からの意気込み、セミナーリーダーやハウスリーダーをはじめとする大学生の紹介の後、サマースクールへの決意を込めて高校生・大学生が風船を飛ばすイベント「オープニングスパーク」を行い、開会式が終了しました。なお、開会式は牟岐町にお住まいの方々に一般公開されました。

10.6.2.リフレクション

期間中に毎晩、各ハウスに分かれてリフレクションをおこないました。リフレクションでは、その日の出来事を振り返りや、次の日の目標を話し合いがおこなわれました。ハウスメンバー全員での話し合いや、ペアになっての話し合いなど、形式を柔軟に変えながら、とても濃いコミュニケーションの場になり、サマースクール期間中に経験したことの意味付けをおこないました。

10.6.3. タレントショー

3日目にはタレントショーを行いました。タレントショーとは、セミナーなどでは見えにくい高校生のタレント(才能)に焦点を当てショー形式で披露してもらうことで、普段とは違うお互いの意外な一面を知り相互理解を深めてもらうことを目的としています。ショーでは、ピアノ・歌・ドラム・カンフー・漫才・剣道など幅広いタレントが高校生から披露され、お返しに大学生からはダンスが披露されました。司会進行は全て英語で行われ、スタンディングオベーションも起こるなど、普段は味わえないショーの雰囲気も味わいました。タレントショーを機に高校生間の打ち解けもさらに一層進んだようでした。

10.6.4. 肝試し・キャンプファイヤー

最後の夜となった6日目夜には、お楽しみ企画として肝試しとキャンプファイヤーが行われました。肝試しでは、「本気で怖がらせにいく大学生」vs「平然を装う高校生」という構図も生まれ、牟岐の大自然の真っ暗闇の中で夏の夜らしいアクティビティとなりました。

キャンプファイヤーでは、火の女神となった運営委員長の水上の松明から各ハウスの代表高校生の松明へ分火が行われた後、彼らの松明を以って着火が行われ一つの大きな炎が出来上がりました。サマースクールの6日間を通して既に「仲間」となっていた高校生と大学生は、レクリエーションやダンスなどで体を動かし、炎や見つめながらお互いに談笑にふけった後、「stand by me」を全員で合唱して最後の夜を締めくくりました。

10.6.5 メールシステム

3本システムは、期間中、徳島サマースクールのメンバーであれば、誰にでも手紙を送ることができるというもので、コミュニケーションツールとして利用してもらうことを目的としていました。ポストを設置し、そこに入っている手紙を翌朝までに仕分け、各部屋に届けました。多くの人達の中で手紙のやり取りが行われ、本システムは目的に沿い、大いに機能していたと言えます。また、本システムを通して、自然とメンバーとの仲を深められたように思います。

10.6.6.閉会式

閉会式は、始めに主催者代表の佐野義行様、牟岐町の福井町長からのご挨拶をいただきました。大学生代表として、HL代表の大橋修吾、SL代表 Gianina Yumul によってスピーチが行われました。続いてサマースクールを振り返るムービーが始まり、高校生代表として武田悠人、松本昌子の２名から感想が述べられました。そして、ハウスごとに大学生から修了書が手渡され、コーディネーターの水上の合図と共に１分間目を閉じて６日間の振り返りをした後に拍手や別れを惜しむ涙で包まれ、幕を閉じました。

10.7. 牟岐町との連携

徳島のフリーインタラクションでは、県内の上勝町や神山町といった全国でも有数の先進的な取り組みを行っている地域で御活躍中の方を中心に、徳島にゆかりのある方にゲストとしてお越しいただきました。徳島で生まれ育ち、県内・日本全国・世界各地で御活躍されているゲストの方々のお話は、県内の高校に通う生徒にとっては特に身近に感じられたようで、「自分自身も将来は何らかの形で徳島に還元できれば」と話す高校生もおりました。高校生の中では漠然としたイメージでしかなかった「大学生」や「社会人」というものが、この企画を通して、自分の将来に引きつけて考えられるようになった様子でした。

10.8. 参加者について

10.8.1. 参加者内訳

第1回目の開催となる今年の「徳島×Summer School by HLAB」には、徳島県内から30名、徳島県外から9名と、合計39名の高校生が参加しました。徳島県内においては、合計で18の高校から参加者が集まり、徳島県外においては、東京都から2名、千葉県、静岡県、愛知県、奈良県、大阪府、兵庫県、広島県から、それぞれ1名ずつ参加しました。合計39名の参加者の内、21名が女性、19名が男性であり、文系選択者と理系選択者の割合も全体でほぼ1対1となりました。出身地はもちろんのこと、参加者の興味分野も多岐に渡っていたため、徳島県内からの生徒が30名いたと言えど、多様性に溢れるサマースクールとなりました。

10.8.2.高校生の声

高校生の声(県外高校生)
HLABでバックグラウンドの違う高校生、大学生と自分の悩み、夢について語り合い、たくさんの意見を聞くことで初めて夢が現実味を帯びた目標となりました。とてもこれだけでは言い表せないくらいの色々充実した 1 週間でした。本当にありがとうございました!!

高校生の声(県内高校生)
サマースクール期間中は、ゲストの方々や大学生の人達の話から刺激を受け、その刺激を受けて考えの幅が広がっていく高校生達から、また刺激を受けていました。自分と真剣に向き合い、大学生と本音で語り合う機会をいただいたこと、本当に感謝しています。

10.8.3.ハウスリーダーの声

HLABの理念には、「大学生が高校生にとって最も身近なロールモデル、そして情報源になることで、「ともに」将来を考える」と書かれている。プログラムに関わる大学生の中でも特に高校生にとっての「ロールモデル」となることが求められるのがハウスリーダーである。ハウスリーダーは一日の多くの場面で高校生と共に時間を過ごす。起床し部屋を出た瞬間から、朝食、セミナー、昼食、ワークショップ、夕食、リフレクション、そして就寝。
しかし、一週間のプログラムは長いようで短い。明確な目標を持ち、その夢に向けて邁進している人、県外に出る機会がなく、自分にどのような可能性があるのかが分からずに悩んでいる人、目標が見つからずに進路に悩む人、英語に磨きをかけて将来国際舞台で活躍をしたい人、高校生一人ひとりが異なる想いを持ち、異なる悩みを抱えている。限られた時間の中で、高校生の想いを聞き、何を高校生に伝えられるのかで悩んだ。しかし、高校生たちのまっすぐな想いを受け止め、彼らの真剣に悩む表情そして輝く瞳を見ている内に、ロールモデルとして自分ができることは、等身大の自分を語ることだと気がついた。高校生の時に同じように悩んでいたこと、高校時代よりも社会に出る瞬間の方が近づいている今でも様々な悩みを抱えていることを伝え、そして共に夢を語り合った。短い時間ではあったが、高校生たちと正面から向き合い、彼らと語り合うことのできたサマースクールはかけがえのないものであり、そのような機会に恵まれたことに感謝している。

10.8.4　海外大生の声

What does it mean to be, well, "me?" Of course I can trace some amount of my identity to the small amount of space I take up physically, but if I am giving a speech in front of a large audience, I can exist as far out as my voice carries. I can exist as far out as my scent is detectable to a bloodhound. The gravitational force I give off, though small, goes out even further, and the light that shows you who I am, though scattered, would extend out over 20 light-years (that's almost 200,000,000,000,000 kilometers!). This summer school in Tokushima is the same way.
Our brief time in Tokushima as a formal summer school lasted just one week. But looking to the past, consider the hard work by EC and support of government that lasted for many months beforehand, or how long the high school students crafted their applications and anticipated meeting each other at last. What about the paths SLs and HLs took to become so passionate about magic, chemistry, or human rights? And possibly even more importantly, let's look to the future: the friendships and bonds we created with one another and Mugi Town will last for the rest of our lives and likely beyond.
I do not understand the alchemy that occurs during the Summer School: how together we become this much stronger than the sum of our individual members, how even coming back to HLAB yet again I can keep learning more about what liberal arts is, and how I have been fortunate enough to be able to be a part of this family. But like great art, some things can be appreciated without fully understanding it. Thank you to everyone who made this summer school what it was, and I look forward to when our paths will meet again.

10.8.5.運営委員の声

今回のサマースクールは運営委員会の大学生にとっても、非常に良い経験の場となりました。高校生との対話のなかで、あらためて自らの進路について振り返る経験になったとの声や、自らの学業へのモチベーションを得たという声がありました。
また、地元出身の運営委員からは、牟岐町でこのようなサマースクールをすることができたよろこびが聞かれました。
そして、地元牟岐町の方々に対しては、とても手厚い歓迎を受け、非常に感銘を受け、感謝に堪えません。

10.9　終わりに

「世界に飛び込む夏、今徳島で」
このコンセプトが意味する、「徳島×Summer School by HLAB」が描く世界―それは、日本の高校生がおかれた環境からあらゆる境界をとりはらった世界です。それは国境や徳島県・県外といった地図にひかれた線だけではなく、学校間の壁、文系・理系の線引きも含み、参加した高校生が、異なる背景を持つ高校生たち、そして大学生、社会人と出会うことの出来る世界です。世界に飛び込んだ高校生が、何を感じ、想い、持ち帰るのか。サマースクール後にどのように変化するのか。
それは39名参加した高校生に任せられており、ひとりひとり異なります。一年後、あるいは数十年後になって初めて感じられる変化かもしれません。ただ、この学びの自由こそが、多様な価値化を尊重し、高校生が主体的に行動する基盤となっていきます。本サマースクールが高校生にとって、自分のおかれた環境を客観的に見つめ、自分のやりたいことを一度立ち止まって考える機会となったことを願ってやみません。また、豊かな自然と温かな人々に包まれた本サマースクールを通じて、牟岐町は皆の「第二の故郷」となりました。
運営大学生もまた、高校生との対話や地元の方々との協働を通じて、共に学んでいます。高校生にとっての「人生の一歩先を行く先輩」として、高校生と再会した時に一層成長した自分でいられるように、それぞれが、サマースクール後に新たな一歩を踏み出しています。また、サマースクールを機に、徳島を心から愛し、既に再度足を運ぶ県外の大学生も後を絶ちません。
最後に、徳島で初めての開催で右も左もわからなかった運営委員会に丁寧に御指導、御鞭撻頂きました徳島県教育委員会の皆様、牟岐町、そして牟岐町教育委員会の皆様、そして牟岐町教育委員会の皆様、牟岐町商工会、婦人団体の皆様をはじめとしまして、本サマースクールに御尽力頂きました全ての方々に、運営委員会一同心より御礼申し上げます。

徳島×Summer School by HLAB 運営委員会

design / mami jinno

Copyright © 2014 H-LAB All Rights Reserved

*Harvard College Japan Initiative (HCJI) is an officially recognized student-run organization of Harvard College.The Harvard College name and/or shield are trademarks of the President and Fellows of Harvard College and are used by permission of Harvard University.

沿革

2010　高校の進路指導部と協力した座談会事業開始

2011　「HCJI-LAB Summer School 2011」として東京で第一回のサマースクール・プログラムを開催。

2012　「H-LAB」と名称を変え、東京で第二回のサマースクールを開催。スピンオフ・プログラムとして、鳥取で「ブリッジスクール」を開催に全国２カ所へ。

2013　長野県小布施町でのサマースクール「小布施×Summer School by H-LAB」を加え、全国３カ所での開催。

2014　HLABは4年目を迎え、徳島県の教育委員会と協力し同県牟岐町で「徳島×Summer School byHLAB」を開催。スピンオフ・プログラムとして石川県小松市で「小松サマースクール」も開催し、全国５カ所へ広がる。